
陸奥の忍

獅騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸奥の忍

【Nコード】

N1501V

【作者名】

獅騎

【あらすじ】

俺はある日突然転生者になった。そこは別に気にしてない。転生先は長瀬家？しかも爺ちゃんが陸奥？しかも俺に陸奥を継げ？俺は陸奥と忍、両方の業を背負わされる。

任務が一番。どんな仕事も請け負います。それが忍の性なれば・・・

ブログ（前書き）

喰霊・零・も完結してないのにこっちにも手を出しました
でも両方ちゃんと更新していくのでよろしくお願いしますm（

— m

プロローグ

さて、今日は俺の大好きなサンデーの発売日だ。
俺はいつもの如く財布を手に取り近場のコンビニに向かった。

――――

キキイイイイ!!!

キヤアアアア!

甲高い車のブレーキの音と周りの悲鳴しか俺の耳には届かなかった。
俺が覚えているのはここまで。

俺は確か買い物に出かけて部屋にはいなかった。なのになぜか気が
付いたら自分の部屋の布団に横になっていた。

俺は理解の追いつかない頭を必死にフル稼働する。
それでも現役大学生。二十年ほどこの世界で生きて来ているので、
最低限の「常識」は知っているつもりだ。

しかし今回ばかりはその「常識」外の事がおこっている。としか俺
の頭は認識しなかった。

「一体何がどうなってんだ？」

『これは褒美じゃ』

俺が疑問を言葉に出すとまさに天からという比喻が当てはまるように
に頭上よりも遙か上から回答が帰ってきた。

「誰だっ！！」

「ふむ。予想通りの反応じゃな。よかろう、我が姿そなた其方に見せてしんぜよう」

謎の主は一人で話を進めてしまっていてしまっている。

そして突然の発光。

俺はあまりの光の強さに目を覆う。

その強烈な発光の後に俺の目に映ったのはその年でどうしたら髪がそこまで伸びるのか？と突っ込みたくなるほど、髪のがい幼女だった。

「誰が幼女じゃ！」

「あれ？俺今口に出したっけ？」

「ふん！貴様らの様な下等生物の思考も読めずにこの世の統治などやっつけられるか！」

自称神様は「自称ではない！本当に神じゃ！」・・・本当の神様に怒られた俺は謝った。

ここでは素直に謝ったとおこう。あとあと面倒だから。

「で、何で俺は自分の部屋にいるんだ？俺は確かサンデーを買いにコンビニに行く途中で・・・？あれ？その後どうなったんだ？」

俺は今まで覚えていた記憶が失われていることに動揺を隠せない。

「おそらく其方の体と一緒に脳も消滅したからであろうな」

「はい？」

俺は神様のあまりにも一直線すぎた解説に思わず聞き返してしまっ
た。

「だから其方の体はもう既に火葬されてこの世には無いのじゃ。だ
からこれから記憶も無くなってくる。知りたいか？自分の死に様を」

「いや、いい。何か聞くのが恐ろしくなってきた。それに多少は想
像がつく。大方俺が誰かを助けてそのまま誰かを庇ったまま死んだ
とかなら？」

「ご明察。伊達に大学生やっくらんのう」

神様は笑顔でそう言いながら手を叩いている。
バカにしてんのか？

「其方は少女を助けたのだ。詳しい事は其方が望まぬので言わんが、
その助けた少女の両親がせめて天国では幸せになつてください。と
拝まれてしまつてな。我らは通常人間の願いは聞かぬ。人間の願い
など自分の傲慢さに気づけぬバカどもの戯言に過ぎんからのう。だ
がしかし今回の願いは対象のお主が死んでしまっているし、願い主
が自らの幸せではなく、其方の幸せを望んだ。だから我らはこの願
いを受け入れる事にしたのじゃよ」

神様はクソ丁寧に説明してくれた。

まあ俺には関係無いが。

「其方、生き返らないでこのまま輪廻の輪から外されたいか？」

神様がこつちを黒いオーラを出しながら睨んでくる。

「すみません。黙って聞きます」

俺は素直に謝った。

その後の俺の進路に関わるので。

「うむ。素直でよろしい」

神様はそう言うと、指をパチンと鳴らした。

すると、一個のテーブルと二脚の椅子が出てきた。テーブルの上には一枚の紙と羽ペンが置いてある。

「其方の先ほどの質問に答えよう。まあ座れ」

俺は神様に促されるまま椅子に座った。神様はそれを確認し話しを進める。

「其方は先ほども言ったように少女を救って死んだ。だが願いを受けた我らは其方の魂をあの場合からこの部屋に連れてきたのだ。あそこに残したままだとそのまま一緒に天界に昇ってしまうのう」

神様は一口入れてあった紅茶を含んだ。

俺もそれに習って口に紅茶を運ぶ。お！うまい。

「それで其方にはパラレルワールドに飛んでもらう」

「パラレルワールドってあのこの世界には何十にも展開されている世界の事か？」

「遠いようで近いな。パラレルワールドとは自ら創り出す世界の事じゃ。つまり其方がたとえ二次元の世界に飛んだとしてもその世界は其方自身のパラレルワールドということじゃ。だから其方がいくら二次元の世界を変えても事実上変わらんのだよ」

「じゃどの二次元の世界でも行けるのか？」

「無論じゃ。転生という形にはなるがのう。で、どこが良い？」

俺にとって二次元とは夢の世界。小さい頃の夢は魔法使い。よく女の子みたいと笑われたものだ。しかしその頃の夢がいま叶おうとしている。もちろん行きたい世界は決まっている。

「俺が行きたい世界は『魔法先生ネギま!』の世界だ」

「ふむ。ネギまじゃな。では次は欲しい能力を三つ選べ。なに、ここからは我らから其方への褒美じゃ」

そついうと神様は胸のない胸を張って言った。

「なつなな何を言い出すのだ、貴様は！」

おお。焦ってる焦ってる。

「いや、俺何も言っていないんだが」

「で、何がいいんだ？」

おろ？何か呆気ないな。

「当たり前だ！貴様のペースにいつまでも付き合ってもらえるか！！」
キレられた。まああまりあの姿で凄まれても怖くはないが、ここは素直に食い下がり話しを・・・（以下略）

「俺の望む能力は1 魔力が気を木乃香より少し多めに。2 イマジン幻想
ブレイカー殺し3 翼。この三つだ」

「ふむ。了解した。生まれる場所や時代はどの辺りが良いのだ？」

「んー、場所はネギまの登場人物と関わりのある場所ならどこでもいいよ。時代も原作にそって生活できるように」

神様は俺が指定した事柄をサラサラと紙に書いていく。
以外と達筆だった。

カタン（ペンを置く音）

「よし、できた。これで其方は正式な転生者だ。思う存分楽しむがいい」

そういうとまた神様はパチンと指を鳴らした。
今度は白い扉が出てきた。

「其方の原作の記憶はパラレルワールドに持っていくことは原則出
来ない。だが、それ以外の記憶は五歳時に戻るようになってる。」

「ああ、何から何まですまないな。最後にお前の名前を聞いてもい

いか？」

もう会うことは無いだろうがせめて名だけは聞いておきたい。

「ふっ、律義なやつじゃ。我が名は不動明王。火を司り、人の煩惱を焼き尽くす神だ」

「不動明王か。じゃフドウだな。ありがとう、フドウ」

「だっだれがフドウじゃ！もう良い。お前の足掻く様を我らに見せてくれ！」

俺は振り返り手だけを振った。

そして、俺は白い扉をくぐった。

ブログ（後書き）

更新は毎週日曜日です。

よろしくお願ひします m ((m

第一話（前書き）

さてさて、第一話でございます。

そしてすみません。プロローグを一話と表示してしまいました。

ではございませぬ

第一話

よっ！俺は長瀬^{ながせ}颯。神様に転生者として新しい生をいただいてから早五年。俺は長瀬家で一人前の忍になるべく日々修行に励んでいたらしい。

らしいというのも、今記憶が戻ったのでいまいち実感が湧かない。だがまあ、鍛えられた体を見る限りそうらしい。それと神様にもらった力を一度も使ったことがない。なのでどういう風に（特に翼が）能力を付けてくれたのかが分からない。

「まずは、魔力が気だな」

俺は気の出し方なんて知らないので全身に力を入れてみる。すると体が小さく発光した。

「こりゃ気だな。忍の俺にとってはちょうどいい。色々と改善の余地ありっと」

俺は手帳に特徴を書き留めていく。いきなりこんなに大量の情報を俺に処理出来るほど優秀な演算機能は持ち合わせてはいないので・

・
「よし、次は幻想殺^{イマジンプレーカー}した」

召喚札で鬼を召喚する。

ちなみに俺は忍術より陰陽術の方が得意だったりする。そのせいで父上には呆れられたが・・・

いや、父上が気まぐれで陰陽術教えるから悪いんだ。うん、きつと
そうだ。

俺はもちろん周りに音が漏れないように防音結界を張るのも忘れな
い。

ガアアアアアアア！！！！

鬼が意味不明な叫び声を上げる。

「さて、いくぞ。まずはその幻想をぶち壊す！イマジンプレーカー幻想殺し！！！」

俺の右手に発動した幻想殺しはイマジンプレーカー一瞬で鬼を煙にして札に返した。

「よし、これも上出来だな。だが近付いて直接触れないと効果無し
「体術の強化はやむなし」

また一つ手帳に書き加える。

「じゃ最後は問題の翼だな。っふ、自分で頼んだくせに口に出すと
笑ってしまふな。思いつきりファンタジーじゃんか」

俺は翼の出し方ももちろん知らない。だがまあ適当に背中の肩甲骨
当たりに力を入れてみる。

バサアアア

俺は恐る恐る自分の背中に広げられた翼をみる。
そこには漆黒の翼が二枚大きく広げられていた。

「おお。すげえ。でも飛べんのかなこれ」

そう、これが最重要だ。飛べない翼を持っていても使えないのではただの邪魔なみにすぎない。

俺はゆっくりと翼を動かしていく。

一回。二回。五回。十回・・・
次第に数を増やしていく。

俺の足はゆっくりと床を離れ俺は宙を舞った。

舞ったと言ってもその場で天井付近まで飛び上がっただけなのだが。

羽をしばらく動かしていても疲れないので体力の浪費は少なくて済む事が判明。

「うん、能力は三つとも上等だな。ありがとう、フドウ」

空から『フドウでは無い』と否定の言葉が降ってきそうだと。

ドタドタ!! (多分廊下を走る音)

「颯! お前の妹が生まれそうだと! お前も来い!」

父上は俺の返答も聞かずに俺の腕を掴み、疾走した。

俺はというと父上に引きずられている。と言った方が的確だろう。

「父上、俺達が母上の元に行っても何も出来ないと思のですが・・・」

父上は俺の言葉を聞きき今度は急停止。もうちよつと俺を丁寧扱

って欲しい。ここまで来るのに俺はボロボロだ。

「うむ、そうだな。産婆さんもいるしな。そうだな。うん。大丈夫だ」

父上は落ち着かない様子で部屋の前を右に左にと歩き回っている。

何せ女の子だ。いくら厳しい父上でも娘の顔を見るまでは修行に身が入らないらしい。

いつもは一つも無いスキが今日は沢山見える。まあかと言って手を出す気にはならないが。

「父上、少し落ち着いて下さい。母上は部屋の中で頑張っているんですから「オギャアアアア！」「生まれた！」

「生まれたああああ！！！」

父上は文字通り飛び上がった。産婆さんが部屋の戸を開け生まれたばかりの赤ちゃんが顔を出す。

「元気な女の子ですよ。おめでとうございます。それとお母さんは出産で疲れているので、騒がないようにして下さいね。じゃあ私はこれで」

産婆さんはそう言うと言って帰って行った。

俺達は産婆さんに礼をいい、帰りを見送ってから母上と生まれたばかりの妹の元へと急いだ。

「よく頑張ったな」

父上は一言言つと母上の頭を撫でる。

「あなたが名前をつけるって言ったけど、決めたの？」

「ああ、楓だ。楓の木のように大きくそして、これからの裏世界でも生きていけるよう強くなつて欲しいという願いを込めてな」

「楓……か。良いんじゃない？私はそれに賛成。颯は？一応あなたの妹だし名前を考える権利はあるわよ」

「俺は楓のままがいい」

「何を顔を真っ赤にしてるんだ？」

っ！！

俺は咄嗟に自分の手で顔を覆つ。
本当何で顔赤くしてんだ？俺。

「何でもない！俺、ちよつとその辺走つて来るから飯の時間になつたら呼んで！」

俺はおそらく赤い顔のまま外に出た。火照つた顔に早朝の風は清々しかった。

と言つてもまだ11月。肌寒い事には変わらない。

ヘックション！！

「うう、風邪引いたかな？でも可愛かったな、楓。俺の妹かあ。俺は一人っ子だったから兄妹っていなかったから、なんか新鮮だな」

俺は栗の木の上で一人で笑っていた。小さな命の誕生に心踊らせながら。

何も楓の誕生日に俺の記憶戻さなくても・・・

第一話（後書き）

一日おきに夏休み中は更新していきたいと思います。

感想やご意見等お待ちしております。

第二話（前書き）

ユニーク10000越え！ありがとうございます！

第二話

楓が生まれてから早三年。毎朝羽で山の上を飛び回るのが俺の日課になっていた。

もちろん、翼の事は誰にも言っていない。もし長瀬家に翼のある息子が生まれたと知れたら仕事にも影響は出るだろうしここに居られるかも分からないからな。

俺は父上の紹介で去年から裏の仕事もこなしている。何でも俺の量の量と陰陽術の腕は相当らしい。仕事は死なないであろうというレベルの仕事をもたらしている。

俺はいつもの飛行コースを回り終え、自分の部屋の近くにある栗の木の上に着地した。

俺は栗の木を降り、部屋に戻って札の整理でもしようかと部屋の襖を開けようとした時、俺は何かに飛び付かれた。この何かが近くにいることを察知したので俺はわざと栗の木の上に着地した。そうで無くては毎度毎度栗の木の上に着地など面倒な事してられない。

それにこの辺にはこの時間誰も来ないので、伸び伸びと羽を広げられるのだ。普段は人払いの結界を張っているのだが、なぜかこの何かには効かぬようである。

「兄上え！遊んで欲しいでござるー！」

何故か知らんが「ござる口調」になってしまった何か。妹の楓が俺の背中にのしかかっている。重くもないので別にいいのだが。

「気が早いぞ、楓。俺はまだ朝食も食ってないんだ。もう少し待っ

てる。そしたら遊んでやるから」

「絶対でござるよ。逃げないで下さいでござる。」

まだ口調が定まってないせいか、少し可笑しいところもあるが、そこが可愛いのだ。

俺は後ろを向き、手だけを振って朝食を食べに茶の間に向った。

俺はあまり遅くなると楓が怒りそうなので、用意してあった物を口にかけてこむ。

「楓に今日は颯のお仕事ないわよって教えたら一目散に部屋に走っていったわ」

母上は流しで既に食べたのであろう父上の食器を洗っている。

「楓が俺の仕事が無いのを知ってたのは母上のせいですか」

楓は普段俺は仕事があるので遊んでやれないのを知っている。その楓が俺に遊んで欲しいとせがんできたという事は、今日は俺の仕事が休みだという事を知っているという事になる。

「たまの休みで休みたいのは分かるけど、楓の相手もしてあげて。兄上に会えなくて寂しいって言ってたわよ」

「ああ、確かにここ最近楓と話してもいませんでしたからね。今日は楓の希望通り思う存分遊んでやりますよ。ごちそうさまでした！」

「お粗末さま」

俺は母上の言葉を待たずに自分の部屋まで全力疾走する。

「悪い、待たせたな楓」

楓は俺の布団の上でゴロゴロしていた。とても気持ちよさそうに。

「いいでござるよ兄上。それよりも今日は何して遊んでくれるでござるか？」

楓は俺の布団の上で飛び跳ねながら言う。

「楓、とりあえず布団から下りなさい、しまつから」

「兄上「ん？」「兄上の仕事ってどんなのでござるか？」

俺が布団をたたんでいると急に真面目な顔をして楓が聞いて来た。

「どうした？急に」

「いいから、教えて欲しいでござるー！」

少なからず興味はあるということか・・・

「そうだな、簡単に言うと困ってる人を助ける仕事だ。楓はそういうのに興味があんのか？」

嘘は言っていないよな。困^{クライマン}てる人の希望を叶える仕事だし。まあそのために人を殺すことはあるが・・・

「拙者も兄上と一緒に困ってる人を助けたいでござるー！」

俺はその言葉に顔をほころばせてしまった。多分、嬉しかったんだと思う。

「そっか、でもそれは楓が大きくなって兄ちゃんみたいに強くなれないとな」

「強くないといけないでござるか？」

「ああ、強くないと助けられない時もあるんだ。だから兄ちゃんは楓が早くそっなるのを願ってるよ」

俺は楓の頭を優しく撫でた。

「さて、今日は何して遊ぶ？今日は兄ちゃん、楓のしたい遊びに何でも付き合っぞ！」

楓は難しい顔をして何かを考えていたようだが、俺がそう言う気持ちは仕事から遊びに切り替わったらしく、元の楓の顔に戻っていた。

「んつとね、鬼ごっこがいい！」

「よっし、鬼ごっこだな。じゃあ兄ちゃんが鬼だ。十数えるから逃げろよ！」

俺は後ろを向き数え始める。

「いち」

楓は勢いよく俺の元を離れて行く。

「こーい」

楓の足音はどんどん離れて行く。

「やーん」

結構遠くまで行ってしまった。

「しーい」

もうどこにいるのか分からない。

「しーお」「ろーく」「しーち」・・・

「じゅーうー！いくぜ楓！」

うちの庭はちょっとした広場になっているので見晴らしがいい。だが楓の姿は見えない。そうとう遠くまで逃げたらしい。

とりあえず俺は楓の気配を辿って探して行く。これは鬼ごっこでは反則だろうか？まあ、いいや。

しばらく気配を辿ると滝の前に出た。ビンゴのようで人の気配が滝の裏側からする。

「楓！そこにいるのは分かっている。大人しく出てこーい！」

俺のそう言いながら、滝の裏に回る。

その瞬間、背後から茂みから人が飛び出る音が聞こえた。

「ワイイ！兄上引っかかった！」

茂みから飛び出たのは他でもない滝の裏から気配のした楓だった。

「ほお、この俺を本気でないにしろ出し抜くとは将来期待出来るな」

俺は楓を追う。今度は見逃さないようにしっかりと。

「こらーまで楓！」

その後は俺は部屋の前まで楓が逃げてグルグル同んなじ場所を回っていた。

「タッチ！捕まえた！」

俺は楓の頭にそつと触れた。

「むう、捕まったでござる」

「でも楓、さっきのはすごかったな。まんまと引っかかったぜ」

「へへへ¥（／／／／）¥」

「ほう、鬼ごっこか。楽しそうでありよりじやの。子どもは無邪気が一番じゃ」

振り向くとそこには、父上と爺様が立っていた。

第二話（後書き）

感想やご意見お待ちしておえます。

第三話（前書き）

PV1000 越えありがとうございます！

これからも頑張って更新していくのでよろしくお願いします

第三話

俺は予想もしていなかった言葉に驚きを隠せない。

「・・・ええ！？いやいや、俺、陸奥なんて知らないし！と言うか俺は伊賀流の忍者だし！それに俺は長瀬家を継がなくちゃならないし！」

俺はパニック状態だったためか長々と言葉を重ねる。そして俺は泣きそうな顔で助けてという念を込めて父上を見た。

「もちろん長瀬家はお前に継がせるつもりだ。だが先日陸奥冬弥が病死してな。継承者がいなくなってしまったらしいのだ」

なにに！？まさかの父上もそっち派かい！というか何か芝居くさいぞ。

「冬弥はもともと体の強い奴ではなかった。だがこんなにも早く逝ってしまうとは・・・」

爺様が泣きながら言うてくる。なんか胡散臭いのは気のせいかな？

「叔父上、それとうちのクソジジイ！勝手に僕を殺さないでください！」

声のした方向を見ると、一人の優しそうな青年が不機嫌そうな顔をしていた。

「始めまして。僕は陸奥冬弥」

「長瀬颯です」

体が弱いというのは本当のようだ。顔色が悪いし、腕や足も細い。

「君のことは爺さんから聞いてるよ。かなりの腕前らしいね」

この前も言ったが、俺の陰陽術の腕前はもはやプロ並み。それも年齢が八歳ときたもので、まさに一世一代の天才で将来は立派な魔法使いも夢ではないと期待されている。

俺は頼りにされるのは嫌いではないが、期待されるのは好きではない。あまりにも強く大きい期待に答えようとして潰れる奴を俺は今までに何度も見てきた。

「いえ、決してそんなことは」

「その年ですでに謙遜けんそんをするとはね」

冬弥と名乗った青年は笑った。大きいだっけ見た目は八歳でも中身はれっきとした大学生だ。謙遜ぐらいする。

「で、さっきの話しただけど叔父上が言ったように僕は体が弱くてね。僕じゃ陸奥の力は使えない。それで陸奥の血が流れている君に陸奥を継いで欲しくて今日は来たんだ」

父上に客が来ていると母上が言っていたが俺を陸奥に引き入れるための親子会議をしていたということか。

しかし、俺が忍であり陸奥であるということは、

「それはつまり、忍者としての業も陸奥としての業も俺に背負えと？」

「理解が早くて助かる。幸い体はこいつに鍛えられていたらしいからのう」

爺様はさも愉快そうに顎の髭を撫でた。

こいつ殺してえ！だが今こいつと無手で勝負をしてもまず間違いない俺は負ける。

俺は無駄な怪我と争いはしたく無いので（というよりこいつと喧嘩したら本当に死ぬので）俺は感情を心の中に押し込んで我慢する。

「お前はそれでいいのか？」

父上、今さらそれを聞きますか？

「父上の下手くそな演技などすぐに見破れますよ。それに陸奥を会得したほうがこれからの仕事に有利なのは事実ですし」

父上は一言すまない、とだけ言っつて頭を下げた。

「では三日後、迎えにくる。それまでに荷物をまとめておけ。しばらくはこっちに戻れないだろうからのう」

「分かりました」

そう言っつと爺様と冬弥さんは帰って行った。

俺が二人を見送り終わると隣で楓が俺の裾を引っ張っている。

「兄上に拙者はまた会えなくなるでござるか？」

楓の瞳は涙でいっぱいだった。今にも溢れ出しそうなそれを必死に耐えているようであった。

「うーん、そうかもしれないな。しばらくこっちに返って来らないって爺様が言ってたしなあ・・・」

俺はそんな楓の前で言葉を濁すことしか出来なかった。勇気のねえ兄ちゃんだな。

「じゃあ、拙者は、楓は、強くなって、兄上の帰りを、待っているでござる！それで、兄上が帰ってきたら、一緒に絶対仕事するでござる！」

楓の顔は耐えきれなくなって目から流れ出した涙でぐしゃぐしゃになっっていた。

「ああ、約束だ。期待してるぞ」

三日というのは早いものであつたという間に過ぎてしまった。

俺は父上に貰った鉄で出来た額当てをしっかりと頭にくくり付ける。

「準備と覚悟は出来たかのう？」

爺様が少し痛いけな顔で俺を見てくる。

んな顔で見んじゃねー。クソジジイ！そう思ってるんなら初めから俺に陸奥継げなんて言うな！

と俺は心の中で爺様を罵倒する。あくまで顔はいつも通りに。

はい、と俺は小さく返事をし家族の方を向いた。今日は家族が全員集合している。こんな日はあまりない。大抵父上は朝早くから仕事に行ってしまうし、帰りも遅いからだ。

「じゃあ、いつてきます」

俺は家族に向って深く一礼する。

「忍として恥ないような実力を身につけてこい！」

「はい」

俺は父上の言葉を聞き、車に乗るため家族に背を向ける。

「兄上、約束絶対でござるよー！」

俺の楓の言葉の返事は片手を上げただけの簡単なものだった。

第三話（後書き）

感想やご意見お待ちしております

第四話（前書き）

お気に入り件数も順調に増えています。

磯城又はこの事実に驚きを隠せません（泣）
読んで下さる方々には本当に感謝しています。

では、第四話目。どうぞ

第四話

俺が陸奥圓明流を習い始めて十年が経過した。

この十年、本当に辛かった。

まずここに来た瞬間に陸奥とは何か。陸奥圓明流とは何かを散々叩き込まれた。

そして俺がそれが何たるかをやっと理解したと思うや否や今度は早速修行に入られた。

「この十年、俺本当によく死ななかつたな。うん。よく頑張ったよ」

俺は涙を流しながら自分を褒め称える。

「っと、もうこんな時間か。急がねえとじっちゃんに怒られるな」

俺がここに来て変わった事。それは爺様をじっちゃんと呼ぶようになったこと。

じっちゃんに、いつまでもその呼び方されると他人行儀だと言われたので俺はじっちゃんと呼ぶとこにしている。

そして俺が焦ってる理由。今日は俺が陸奥を正式に継ぐ日なのだ。しかも俺の相手は冬弥。(この呼び方も冬弥が望んだので)

冬弥は小さい時から陸奥圓明流をじっちゃんから教わっていた。技の習得の早さといい、強さといい、じっちゃんを凌駕していたそう。だが、冬弥の体が陸奥になることを拒んだ。冬弥の体は病氣と

いう名の悪魔が浸食していった。

(冬弥はもしかして死ぬつもりなんじゃ・・・)

俺はそんな思考に駆られながらも対戦場所に指定された河原に急ぐ。

「待ってたよ、颯」

俺はゆっくりと冬弥の前まで歩いていく。多分今の俺の顔は相当不安そうな顔をしているんだろうな。

「今日お前が僕に勝てれば晴れて陸奥を名乗ることが出来る。けど僕も陸奥の血が流れている。それなりのプライドがある。手は抜かないよ」

待ち構えていた冬弥はゆっくりと構える。俺もその動きに習い構えをとる。

「始め!」

じっちゃんの掛け声で俺達の殺し合試合いは開始される。

冬弥が高速で飛んで俺の前に現れる。

(早い!へへ、ずるいぜ冬弥。こんな実力隠してたなんてよ)

俺は冬弥が飛んでくるであろう場所に膝を構える。だが懐に入つて来た冬弥は俺の膝を左手で静止し、拳を叩き込んでくる。俺はそれを首を降るだけかわし、無防備な脇腹に空いているもう片方の足で蹴りを回転をつけて食らわせる。

「っぐ!!」

冬弥は俺の蹴りで飛ばされる。

(今の感触で肋骨の二本はいったな)

「冬弥。まだまだだろ?立てよ」

冬弥は俺の言葉に何らかの感情をもち立ち上がった。

「強くなったな、颯。じゃあ俺も本気をだそう」

口調だけじゃない。身に纏う雰囲気までもが一瞬で変わった。今までの優しい冬弥を包んでいた物とは格段に違っていた。

俺が一瞬冬弥に恐れを感じた時、冬弥は俺の懐に入ってきた。

もちろん俺は後ろに跳躍し、距離をおく。だが冬弥は俺のその動きにも追いつき溝うちに蹴りを喰らわせた。

「っか!」

俺は膝をつかないように持ちこたえる。そして冬弥の次の攻撃を受けられるため構えを取り直す。

「俺も捨てたもんじゃないだろう?お前に負けないように修行は地道に進めて来たからっ!?!がっはっ!」

突然の吐血。精神的にはいくらでも続けられても身体的に圓明流の技は冬弥を受け入れなかったようだ。

「俺ももう長くないというのは自分でも分かる。だから颯。俺はお前と最後まで全力で戦って死にたい！」

口の周りの血を道着の袖で拭いながら冬弥は俺に訴える。

「分かった。俺は最後まで冬弥につき合うぜ」

俺は自分のセリフを言い終えまた構えた。同時に冬弥も構える。

一瞬の静寂。そして一瞬のそよ風が二人の間をすり抜ける。そして二人は動いた。まずは颯の正拳。それを冬弥は受け流し、逆の手で巻き付けて関節を決めてくる。

「ちいいいい!!」

俺はそれを腕をひねって回避。そのまま冬弥の腕を取り背中を合わせた格好で肘関節を決め、一本背負いで肘を折る！

「ぐう！」

そこに落下して来る相手の頭部に蹴りを入れる。

ドサツッ!!

冬弥の倒れる音が聞こえる。俺には分かった。その冬弥だった体はもう生きてはいないことを。あの技「雷」を使おうと決意した瞬間に。

「勝ったのか、冬弥に」

じっちゃんやんは孫が死んだというのにやけに落ち着いた様子で俺に問
いかけた。

「冬弥は死のうとしていたんだ。この戦いで俺に・・・」

俺は冬弥の死を悼んだ。だが俺達の仕事上人を殺すことなど日常茶
飯事。泣きわめくことは無い。

ただ、俺の頬には一度だけ暖かいものがつた。

第四話（後書き）

はい、今回初めて陸奥圓明流の技「雷」が登場しました。

今後陸奥圓明流の技が出るのは麻帆良学園に行つてからですが、沢
山出して行くつもりです！

感想を書いて頂いている方々には本当に感謝しています。

感想、ご意見お待ちしておりますm() () m

第五話

「じつちゃん世話になつたな」

俺は冬弥の葬儀を終え正式に陸奥を継いだ。

そして俺は今日、長瀬に帰る。そのためにじつちゃんは出迎えに来てくれている。

「すまんかったな。いきなり押し寄せて陸奥を継げなどと」

じつちゃんは申し訳なさそうな顔をしている。

まあそれが本心だかは知らんが・・・

「いいさ。それに俺は忍としても陸奥としても業は背負わなきゃならないんだ。それならいつそ、両方背おつちまったほうがいい」

俺は笑顔でじつちゃんを見る。じつちゃんも俺の言葉で吹っ切れたようで、ニカッと笑った。

「今日でうるさいジジイともお別れか。静かになって助かるわ」

「儂もお前がいなくてせいせいするわい」

俺たちは互いに皮肉を言い合った。笑顔で。

「じゃあ、行くな」

俺はじつちゃんに別れを告げ、背を向ける。

「陸奥圓明流千年の歴史に敗北という二字はない。負けるでないぞ、颯」

俺の背にじつちゃんが優しく、しかし威厳を持って語りかける。

俺はその返事にいつかしたのと同じように手を挙げた。

「この家に帰って来るのも十年ぶりか。懐かしいね」

俺は送ってもらったタクシーにお金を払い荷物を持って久しぶりの長瀬家の門をくぐった。

懐かしい匂いが俺の鼻腔をくすぐる。

俺は父上に会うため書齋に向かう。書齋までの慣れ親しんだ廊下を一步一步踏みしめながら歩いた。

トントン

「入れ」

俺は書齋の襖をゆっくりと静かに開け、父上に歩み寄る。

「父上、長瀬颯。只今年の修行を終え帰宅いたしました」

「おかえり。大変長い間の修行本当にご苦労だった。今日は久しぶりの我が家でしたっけ休みなさい。お前当てに仕事が来てるから明

日には依頼主クライアントの所に行ってもらわなければならないからな」

父上は静かに笑みを浮かべて言った。その微笑みは実に久しぶりで心地よかった。

俺は父上としばらく修行や冬弥が死んだ事などを報告してから書斎をあとにした。

（今日は全てが久しぶりだな。まあ、当たり前だが）

俺は一人で苦笑をもらす。そして俺は自分の部屋に入った。

慣れ親しんだ自室は俺がここを離れてから少しも変わっていなかった。

俺は母上にも後でお礼を言いに行こうと思いつながら部屋に置に転がった。

（夕食までこうしていよう）

俺が気がついたらフドウが目の前にいた。

「うわっ！何だよフドウ！いきなり俺の夢に出てくんない！」

「誰かフドウじゃ！で、どうだ？能力の具合は？」

なるほど、自分の仕事に不備がないかの確認という事か。さすが抜かりがないね。

「上等だな。気の量も申し分ないし、イマジンプレーカー幻想殺しも、翼も上出来だ」

「そうか、ならばよかった。私の仕事に不備があるとは思えんが」

応な。一応」

二回言わんでも分かる。

「う、うるさい！要件はそれだけじゃ！もう会う事も無いだろうからな。これでお前とも見納めじゃ」

「何か今日は本当に別れが多いな。ああ、陸奥との繋がりを作ったのはフドウか？」

「そうじゃ。そっちの方が面白そうだし」

「そうかい。まあ、俺としても強い方がこれからの役に立つだろうし、感謝しとくよ」

「ふむ、素直でよろしい。ではな」

「おつ」

俺の視界は真っ白になり、やがて消えた。

起き上がり時計を見るとすでに時刻は六時を回っていた。俺は久しぶりに夕食の準備を手伝おうと思ひ、台所に向かう。

母上は一人でまな板の上の食材を切っている。台所には美味しそうな匂いが立ち込めていた。

「母上、久しぶりに俺も手伝いますよ」

「颯！帰ってたんなら顔ぐらい見せなさいよ！」

帰って早々怒られた。18にもなるいい大人が・・・

「仕方ないじゃないですか、家帰って父上の所に顔だして部屋戻ったら眠くなって気づいたら寝てたんですから」

「部屋に行く前に私の所に来なさい。まあ、お疲れ様。陸奥の修行は生半可な覚悟じゃないとダメだからね」

母上はそう言って笑った。俺もその笑みにつられて笑う。

「今日はあんたのためにご馳走作るからもう少し待ってなさい」

俺は母上の言葉に甘える事にした。まだもう少しかかりそうだったので、俺は自室に戻る。

「久しぶりに羽でも広げるか」

あつちで修行している時はろくに広げられなかった。じつちゃんに認識障害と人払い効かないし。

一回それをやればれそうになった。間一髪で翼をしまったから良かったものの・・・

俺は自室の庭に認識障害と人払いの札を張り思いっきり翼を広げる。

「んー！やっぱいいな。久しぶりに飛ぶか」

俺は地面を蹴り翼をはためかせる。顔に当たる風が春の訪れを告げていた。しかしまだ三月。肌寒いのは確かだ。

俺はゆっくりと地面に着地する。

俺はその後夕食を取るため居間に向かった。

色とりどりに並べられた様々な料理。俺はその食事の前に正座する。

「あれ？そういえば、父上。楓はまだ学校から帰って来ないんですか？」

ギクウ！！！！

「か、楓はその、今日はだな、仕事があつてな、帰ってこんのだ」
何か隠してやがんな。

「父上。苦しい下手な芝居はいいですから、楓はどうしたんですか？」

父上は一瞬困ったような顔で母上を見ていたが、観念したようで仕方なく俺の方に向き直る。

「楓は麻帆良学園という関東にある学校に通っているんだ。お前に何の知らせも入れなかった事は詫びる。すまなかった」

父上はそう言うと頭を下げた。どうも大人といか年上の人に頭を下げられるのは緊張してしまう。だが、今の俺はそんな緊張よりももっと違うものが頭を支配していた。

「楓が、今家にいなくて、麻帆良だが何だかの、学校にいるなあ！
？聞いてねーぞ！」

俺の豹変ぶりに父上と母上は驚いているようだが、全く気にしない。

「だからお前に相談しなくて悪かったと思っているよ。だがそれ程に深刻だったのだ」

「何が！」

父上が嫌そうなため息をつき口を開く。

「成績が・・・」

俺はその言葉を聞き思考が停止する。

「せいせき？そんなにあいつ頭悪かったの？」

両親は無言でコクコクと頷いている。くそ！陸奥の修行の合間にこちに来て勉強教えるべきだった。昔の自分を殺したい。

（仕事が一段落したら、麻帆良に行って臨時の職員として雇ってもらおう。俺は楓しか見ないが）

俺は心の中でそう決意した。

第五話（後書き）

感想やご意見お待ちしております

主人公設定（前書き）

今回は設定を載せて欲しいという意見があったので更新しました

主人公設定

名前：長瀬 颯ながせ はやて

年齢：18歳

職業：麻帆良学園女子中等部2-A担任。数学担当。麻帆良学園の警備員。忍。

特徴：瞳の色は黄色。髪は黒で短髪。ギアスのルルーシュみたいな。
注意：ルルーシュみたいに細くはありません。

身長：185cm

流派：陸奥圓明流

陸奥圓明流は人殺しの技で約千年前に誕生した。陸奥圓明流は負け無しの流派であり門外不出の格闘技である。陸奥圓明流は無手の技であり武器は使用しない。また多彩な蹴り技が多く、組み技では「投げる」「極める」「折る」の三つを織り込んだ技が数多く存在する。

能力：幻想殺しイマジンプレーカー

神様に貰った能力の一つ。全ての幻想。つまり魔法を打ち消す事が可能。その威力は絶大でどんな高位魔法も彼の前では無力。

能力：漆黒の翼フドヨウ

神様に貰った能力の一つ。背中に力を入れると二枚の黒い翼が出現する。翼は刹那のを黒くしたような感じ。本人が翼を見られることを嫌っているので、人前で翼を見せることは無い。

服装：いつもはスーツ。仕事の際は忍者装束か道着を着用する。額には父から貰った鉄で出来た額当てを巻いている。

性格：普段は優しいが仕事になるとちょっと壊れる。色々・・・

主人公設定（後書き）

颯君の二つ名をそろそろ考えなくてはならないのですが、どうも磯城叉には頭が足りないようでどうしても浮かびませんorz

どうかアイディアのある方よろしくお願いしますm（）（）m

第六話（前書き）

気付いてみればPVが100000越え・・・
読んでくれる人たちには本当に感謝しています。

夏休み中は頑張って更新していきます

第六話

俺は今日は父上に言われた通り依頼主クライアントの下に出向いている。
何でも俺が麻帆良に行くためには、この十年間たまっていた俺当ての仕事を片付けてからだと言われた。

（んなの、父上がやっといてくれればいいじゃねえか！一人娘が心配じゃねーのかよ！）

「どうしました？八雲さん」

八雲とは俺の仕事様の名だ。八雲とは昔陸奥にいた男で、宮本武蔵と戦ったそうだ。結果は引き分け。陸奥圓明流千年の歴史の中でも引き分けはあまりない。何でも八雲は腰の刀を使っちまったらしい。陸奥圓明流は無手の技だからな。

俺は考えていた事が顔に出ていたようで、依頼主クライアントが少々怯えている。

「ああ、すみません。少々考え事をしておりまして。続けて下さい」

「はい、最近我々の村の付近では大量の鬼が出没して村の作物を荒らしていくのです」

「おそらくそれは召喚魔たぐいの類の仕業だと思われれます。死亡者は出ていますか？」

「それが出ていないんですよ」

「そうですね。召喚魔は必ず召喚者がいますから、そいつをどうにかしないと完全解決は難しいかと。蛇足ですが恐らく召喚者に命を狙ってきているのではない、と言う事なので命の方は安心していいですよ」

「それは誰かが我々に嫌がらせを仕向けていると？」

こいつ、結構あたまが回るな。理解が早いのは助かる。

「そう考えるのが妥当でしょうね。ですが我々に出来るのは召喚魔を札に戻す前に殲滅する事ぐらいしか出来ませんが……」

俺たち忍が周りの人間関係まで把握し解決するのは不可能だ。というよりそれは弁護士の仕事だ。

「いえ、それだけで充分です。それでお仲間はいつご到着なさるので？」

クライアント
依頼主がありもしない事を期待する目で見る。

まあ、確かに俺の容姿は18歳の少年。一人で退治するとは思っていないようだ。

「この依頼は俺一人で受けもちます」

「何を仰っているのですか！！相手は三百の鬼どもですよ！？いくらあなたが強くても流石に……」

こいつ、俺を見くびってんのか？

「相手がいくらいようと畑には一切被害を出さずに殲滅しますの

でご安心を。それでもまだ不満がございましたら、他のところに依頼して下さい」

俺は少々の殺気を込めて依頼主を睨みつける。クライアント

「っ……分かりました。どうかお願いします」

クライアント 依頼主はまだ少し抵抗があるのか戸惑ったが、了承したようだ。

「ではその依頼聞き届けたり。殲滅決行は今日深夜。決して家からは出ないように、周りの住人にもお知らせ下さるよう」

「承知しました」

クライアント 依頼主は静かに頭を下げた。

その後俺が今日泊まる宿を紹介してもらい別れた。

（そして深夜）

俺は今日忍装束ではなく、道着を着ている。今日の仕事は俊敏さを求められるものではないし、対戦相手が召喚魔なので道着の方が向いている。俺はいつもの額当てと腰の帯をしっかりと結び気合を入れる。

「っし、準備良し。どこからでもかかって来やがれ！」

俺は人払いの札を張った半径二キロの範囲内で召喚魔が出没するのを待つ。

クライアント 一応依頼主には注意はしたが念には念を。という事で。

「っへ！今日は威勢のいい小僧か。若い姉ちゃんの方が良かったの
にのう」

鬼のくせに何言ってるんじゃ！変態になるぞ、貴様！

見ると俺の周りは確かに三百程の鬼どもの囲まれていた。鬼どもは
キへへと気味の悪い笑い方をして楽しそうに笑っている。

（これから楽しむのは俺なんだけどな）

俺は一度唇を緩めた後、鬼どもに問う。

「お前達の目的は何だ？お前達の召喚者は何を考えている」

「ケへへ。今になって命乞いか？これから俺たちに殺されるお前に
そんな事を知っても無意味って人間は言うんだらう？」

ほう、召喚魔のくせによく人間のセリフを知ってるじゃないか。最
近の召喚魔は面白い。

「だったら尚更俺に話したってお前らにも召喚者にも不利な部分
はあるまい？」

鬼どもは何やら相談しているようだが、まあ恐らくは召喚者との念
話だらう。

「いいだらう、教えてやろう。俺たちの目的は嫌がらせだ」

「嫌がらせ？」

「おつよ。俺達に召喚者はいないんだよ。だから毎晩魔力のこもった召喚符からでてこの村に嫌がらせして遊んでるんだよ」

鬼どもがそれぞれ笑う。それに影響されたのか近くの木々がザアアと揺れて不気味な音を出す。

さっきのは念話じゃなくてただの鬼どもの話し合いと言うわけか。

「お前らは契約不履行召喚魔だということか」

契約不履行召喚魔とは召喚魔を召喚したものの、何らかの理由でその契約が絶たれ、召喚符に縛られてはいるが自分の意思で外界に出る事の出来る魔物のことを指す。

「ケへへ。そうさ俺たちは召喚者による縛りが無いからな。やりた
い放題なのだ」

ちよつと待て。こいつらは契約不履行召喚魔。さっき召喚者による縛りが無いと言った。しかし、こいつらは誰一人として殺していない。鬼のくせに人を殺さぬなど鬼ではない。

「一応聞きたい。お前らの召喚者は誰だ？」

「おつと、これから死ぬやつにこれ以上話せねえ。大人しく俺たちに殺されな！」

鬼どもは筆頭の鬼がいい終わると、一斉に襲いかかって来た。ある者は右から。ある者は左から。ある者は正面から。

俺は三百体の鬼どもとともに遊んでやる義理も、その気もないの

で右手の幻想殺^{イマジンプレーカー}しで消滅させていく。

「なっ！お前何者だ！？」

「俺は陸奥圓明流、陸奥八雲。貴様らに現実を教える者だ」

俺は鬼どもに自己紹介をしている時でも体の動きは止めない。ある者には生拳を喰らわせ、ある者には横殴りにし、ある者にはアップパ
ーを喰らわせる。

鬼どもは教えるの動きについでられず、オタオタしている。

鬼の数が三桁から二桁に変わった。その時筆頭の鬼は雄叫びをあげ仲間を奮起させた。

鬼の数が二桁から一桁に変わった。その時筆頭の鬼は士気の下がった鬼どもを叱咤した。

鬼の数が一桁から片手で数えられるようになった。その時筆頭の鬼は少なくなつた戦う気力を失った鬼どもに見せつけるため俺に襲いかかってきた。

「キングが動かねばポーンはついて来ないと。賢明^{けんめい}だな」

「ああん！？何を意味の分かんねえこと言っただ！よくも俺の部下を殺してくれたな」

「ふんっ！あれは貴様の部下ではなく、盾だろっ？」

「黙れっ！！大人しく死ねええええええ！！」

筆頭の鬼は持っていた棍棒を思いっきり振り上げる。

「腹がガラ空きだ。次はもっと気をつけるんだな。まあもう召喚される事はないと思うがな」

俺はそう言いながら、鬼の筆頭の腹に右手の拳をぶつけ幻想を壊す。残りの鬼達も残らず消していく。

「三百体の鬼とやるのは効率が悪いな」

俺は仕事の終了を依頼主クライアントに報告する。

「本当にお一人でなさったので？」

「はい、これからはらくは大丈夫だと思います。しかし新しい召喚魔が召喚されれば被害が出ると思いますので、この札を畑の周りに板を張って立てて下さい。そうすれば、鬼による被害は抑えられます」

ありがとうございます。クライアント 依頼主はそう言って頭を下げた。

今回の依頼はこれで終了。こんな仕事十年分あるのかと思うと気が重い。

しかし今回の契約不履行召喚魔の召喚者って一体誰なんだろう？

第六話（後書き）

颯君の二つ名、ご意見、感想お待ちしておりますm┐┐┐m

第七話（前書き）

今回からやっとな原作キャラに登場してもらいます！

なかなか出なくてすみませんでしたm（（（m

ではごっげ

第七話

俺はあの後、仕事の山に追われた。そのほとんどが魔物退治だったが。だが、ごく稀に人を殺して欲しいというものもあった。まあ、その分依頼料も高いから別に構わないのだが。

「で、最後の依頼主クライアントは誰ですか？」

俺はこの一年間で十年分のたまってきた仕事（勝手に父上が受けたものというのが最近母上の供述で発覚）を死に物狂いで片付けてきた。

俺はとりあえず楓に会わなくてはならない。というのも麻帆良に飛ばされる程の頭ならば、あっちの学校の速度に着いていくのも大変だろうと思ったからである。

「うむ、最後の依頼主クライアントは関西呪術協会の長。近衛詠春様だ。関西呪術協会是我々甲賀の忍も属していて例外ではない。言い換えれば我らの本当の主君という訳だ」

「この場合、俺は陸奥八雲で行ったほうがいいのでしょうか？それとも長瀬颯で行った方が？」

「長は『長瀬颯』をお呼びなのだ。この場合はお前の本名で行け。そしてくれぐれも失礼の無いようにな」

「心得ました。では甲賀中忍長瀬颯。行ってまいります」

俺は関西呪術協会のある京都に向かう事になった。俺は仕事は遠くても周辺の県しか行った事がないので新幹線に乗るのは初めてだ。俺は新幹線に心の中で感動しつつ、京都に向かった。

「ヒョエー！長げえ石段だなあおい。買い物とか行っても帰ってくんの辛くない？」

俺は地道に階段を登り続ける。一応体は鍛えてあるので全くキツクは無いのだが、途方も無く続く階段を見ると登る気が薄れてくるのである。

何段あるか分からない階段を登り続けるという事実から逃れるために俺は回想に入ろうと思う。

俺は昨日父上に中忍の資格をいただいた。中忍とは甲賀忍の中でも管理職と呼ばれている最高の地位だ。

父上はもっと早く資格をくれる予定だったらしいが、俺が陸奥に修行に行く事になったので、保留になっていたのだ。

ちなみに、楓も俺と時を同じくして中忍の資格をいただいたそうだがあいつも色々とおっちで仕事をこなしているらしい。実力も充分。特に忍術に長けているようだと言っていた。

そんな回想に浸っているうちに長い階段を登り終え、鳥居をくぐった。

「お待ちしておりました。長瀬颯様でございますね？」

巫女装束を身に纏った美しい女性が俺の出迎えをしてくれた。

「はい」

「ではどうぞ、こちらへ」

巫女装束を身に纏った美しい女性に俺は案内されて近衛家の廊下を歩く。

その床は綺麗に磨かれていて、一つの汚れもなかった。

「こちらで長がお待ちです」

「ありがとうございます」

俺は案内してくれた巫女さんに礼を言い、目の前の襖を開けた。

「長瀬颯。お呼びに預かり只今参上いたしました」

「待っていましたよ。よく来てくれましたね」

温厚そうなメガネをかけた男性が座っていた。

長と言うには優し過ぎる顔と雰囲気醸し出していた。

(この人が俺の主君か)

「長、早速依頼の方に入りたいのですが」

「そうですね。君には『近衛木乃香』つまり私の娘の護衛をお願いしたいのです」

はい？長の娘の護衛？？

何で最後の最後にそんな面倒な依頼を受けなきゃいけないんだ！！

「……長、それはどのくらいの期間でしょうか？」

「そうですね、木乃香が麻帆良を卒業するまででしょうかね」

「……？今長最後の方に何て言った？麻帆良？？楓のいるあの麻帆良か？」

「長、麻帆良とは麻帆良学園のことですか？」

「そうです。木乃香は君の妹さんとクラスも一緒のようなのですが……」

「受けます！！いやむしろ俺にやらして下さい！」

俺はマシンガンのような早さで言葉を連ねる。

その早さに長は少々引いていたようだが。

「そ、そうですか。ありがとございます。君に受けてもらえて心底安心していますよ。君の二つ名は恐ろしく有名ですからね……」

そんなのだ。なんかこれまで父上が勝手に受けたこなして来た大量の依頼のおかげで、俺は『無音の殺し屋』とか『サイレント・キラー謀灼武人』とか呼ばれるようになってしまった。

「俺だって仕事中外は普通の人間ですから。それに俺は仕事を忠実にこなしているだけですよ」

俺は笑って詠春様に答えた。俺はそんなに怖がられているのだろうか？

「ははは。そうですね。では一週間後に麻帆良に行ってください。ちなみに麻帆良学園の学園長は関東魔法協会の長ですので」

「・・・簡単に言うと、俺は敵対している組織の手中に収まれと」

「そういう事になりますね。理解が早くて助かります。しかし君は私の依頼で行くので、少し違いますがね。書状は出しますので大丈夫だと思いますが、もしも木乃香に何かあったら直ぐに連絡をしてください」

「了解しました。では後日」

これから長い付き合いになる依頼主との依頼契約書を結んだ。クライアント

第七話（後書き）

二つ名の案を出していただいたMr・BLUEさんありがとうございました

ご意見、ご感想、あと『こんな技やって欲しい！』というのがあれば……

お待ちしております。

第八話（前書き）

どうも！最近政権交代でぐちゃぐちゃしてる国会を見て『いいかげんにして被災地の復興と福島の放射能をどうにかしてくれ！』と怒っている磯城叉です。

さて第八話目。やっと颯君が麻帆良にやってきます。

ではではどござ

第八話

今日から俺は表沙汰は新任教師、本命は近衛木乃香様の護衛という依頼を受けて麻帆良学園に行く。

一番心配なのは、依頼対象より楓だ。父上たちがあれ程頭を悩ませているのだから相当なのだろう。楓の学力を見て対策を練ろう。俺は一応転生者（今まで忘れていたが）なので中学校までぐらいなら教えられるだろう。

俺が気にかけていることがもう一つある。あつちは関東魔法協会と言っぐらいだから、『魔法』が存在するのだろう。俺は見た事が無いので分からないが。

「では、行ってきます。楓の学力は俺が上げて見せます」

「頼んだ。あいつの頭はどうも運動神経に持っていかれてしまったみたいだな」

父上が苦笑して言った。そこまで酷いと思うと俺も心配になってきた。

「楓と手合わせするのは初めてですからね。それをバネに勉強頑張らせますよ」

「期待しているよ。詠春様の依頼も、な」

「はい！じゃあそろそろ俺行きます」

「ああ。でもお前たち二人がいなくなると寂しくなるな」

「そうね。颯、楓のことよろしく頼むわね」

父上は悲しげな顔を浮かべ、母上はいつも通りの優しい顔で言った。

「分かってますよ。俺は陸奥颯であり長瀬颯ですから！」

俺は両親に背を向け詠春様が手配してくれた車に向かう。

「行って精々足掻いて来い！」

俺はまた片手を上げてから車に乗り込んだ。

車に乗り込んでから結構な時間がたった。？

初めに目に写ったのは巨大な木だった。

「おかしいな。俺の迎えに楓が来るはずなんだけど・・・」

俺は車を降ろされた場所で呆然と立ち尽くしていた。

学園には俺が到着する時間を概ね伝えて迎えを頼んでいたはずなのだが。

なにせ聞いていた通りにこの麻帆良学園は広い。調べによると初等部から大学部まであり生徒数はこれから俺が働く麻帆良学園女子中等部だけでも2000人を超える。

そんな広い場所で一人にされたら、俺は多分迷ってここから出られないだろう。

(まあ本当に迷ったら翼使って上空から外に出ればいいか)

かといって俺は生憎楓との通信手段を持ち合わせていないので、とりあえず楓を探しに歩き回ってみることにしよう。

「しかし本当にデカイなこの学園は。一日じゃ回りきれねえぞ」

俺はテクテクと目の前の道を進んでいた。がしかし楓の姿は未だに見えず只々建物と建物の間にある道が長く続いているだけであった。

「歩いてばかりでも拉致があかねえ。気と殺気出したら誰か来んだろ」

俺はそう思って気と殺気を通常の半分以下で放出した。

案の定一人の長身で糸目の少女がこちらに物凄い勢いで走って……いや飛んで来た。

「兄上！こんなところで、大量の気と殺気を出さないで欲しいでござる！みんな警戒してるから、とりあえずそれらをしまつて下さい」

俺は楓の敬語に促され気と殺気を抑えた。

俺そんなに大量に出してないのに……

「で、どうして時間になっても俺の迎えに来なかつたんだ？おかげでお前を探すためにそこらへんから嫌な警戒の目で見られる羽目に

なっただじゃないか！」

上手く気配を消しているようだが、生憎俺は人とか魔物とかの気配を探るのは得意だね。ビンビン感じるんだよね。殺意を持った視線が・・・

「その事については謝るでござる。ごめんなさい」

俺に怒られたと思ったのかしゅんとなっている楓。その姿は可愛いが拉致があかないのでいじめるのはやめにする。

「いいよ。じゃ学園長のところに案内してくれ」

「分かったでござる」

俺は楓の案内のもと中等部に到着した。それも女子校の。

ここの学園長は変態か？

別に男子校の方でも問題無いと思うのだが・・・

俺は学園長室と書かれたプレートが掛っている部屋をノックし中に入る。

そこには頭の長い生物が鎮座していた。

！確かあれは『ぬらりひょん』とかいうやつか。しかしなぜ学園長の椅子にぬらりひょんが？はっ！もしか麻帆良学園はぬらりひょんに占領されたのか？

「ほお！何か今失礼な事を考えたの？」

「いえ、別に」

(喋ったあ！やっぱ人間だったか！という冗談はこのくらいにして)

「関西呪術協会会長近衛詠春様の命により近衛木乃香様の護衛をしに参りました、長瀬颯です」

俺は学園長の前で簡単な自己紹介を交えつつ、詠春様に頂いた書状を渡す。

「ふむ。婿殿から話は聞いておる。木乃香はわしの孫じゃ。わしからもお願ひしたい」

「了解しました。で、俺は新任教師という名目で近衛木乃香様に接触すればいいと？」

「ふむ。そういうことになるかの。君には英語を担当してもらいたいのだが、よろしいかの？」

「大丈夫です。英語であれば中学生程度ならば教えられます」

俺は一応これでも現役大学生だったからな。中学生レベルの英語が出来なくちゃ逆に恥ずかしい・・・

「そうかの。でここからはわしの依頼なんだが、受けてもらえんかの？」

アホか？このじじい。俺をこっちに連れ込むつもりか？

「申し訳ありませんが、俺は詠春様の命でここに来ているのであな

たの依頼を受けることは出来ません。ましてや敵対している関東魔法協会に関西呪術協会の使者が来ているだけでも敵対視されているのに、傘下に入れなどともっての外だと思えますが？」

俺は懇切丁寧に事情を説明してやった。まあ、あつちはこれを承知の上でやるうとしていたので無理だろうとは思ったが・・・

「楓君にもお願いしておるんだがのう。受けてもらえば楓君とも一緒に居られるし、報酬もかなりの額を約束するぞい」

こんのクソジジイ！！俺の弱点が楓だって知ってんのか？

「楓君からも何か言ってくれんかのう？」

・・・本つ当痛いところ突いてきやがるジジイだ。その長い頭は伊達じゃないってか？

「兄上、ダメでござるか？あそこにはかなりの強敵も居るでござる。それに兄上がいてくれたら拙者は・・・」

楓の上目遣いが俺を襲う。効果はバツグンだ！！しかしまだHPは残っている！

「・・・つぐ！すまん楓。俺がこいつの下につくと、色々面倒な事になるんだ。（詠春さまが）だから、な？」

俺は苦し紛れに楓に説明する。しかしなんで楓はこんなにもぬらりひよんの命令を聞くのだろうか？金か？いや、楓はそこまで金にはうるさくなかったような気がする。

「・・・じゃ兄上、あの日の約束はどうなるでござるか！」

楓はかなりご立腹のようだ。どうも楓は俺が約束を忘れていていると思っ
っているらしい。

そんな事はないよ。兄ちゃんは約束はいつまでも覚えてるよ。守る
かは分かんないけどね（笑）

「あの日の、約束ねえ・・・確か『一緒に困ってる人を助けたい』
だったか？」

「そうでござる。だから！」

なんかだんだん聞き分けのない楓に腹を立ててきているのは気のせ
いだろうか？それにさっきこの子、『あそこには強敵もいる』って
言ったか？ダメだねえ最近の若い子は。忍を何だと思ってるのかね
？父上にそういう説明されなかったのかね？まあ麻帆良に送られる
くらいだからなあ・・・

「楓、俺たち忍とはなんのために生まれたか知っているか？」

俺は一つの質問を楓に投げかける。これは俺が昔父上にされた話だ。
この話をされた時楓と同じように幼かった。といっても、俺は精神
年齢そんなに幼くはなかったのだが、まあ一応怪しまれないように
翼もあることだし。というか今までよくばれなかったな。うちの父
上も母上も忍だっというのに・・・

「それは敵の情報をあちらに悟られぬよう、自分の主人の元に届け
るため、でござるか？」

「それも外れじゃない。だがなその他にも破壊活動や浸透戦術、暗殺。これが俺たち忍の仕事だ。俺たち忍は主人のために生き、主人のために働き、主人のために死ぬ。つまり主人の敵についてはいけないんだ。それは分かるな？」

「はい、でも拙者は拙者の今持っている力で助けられる命があるのなら、助けたいと「本当にか？」うっ……」

「お前は強いやつと戦いたいだけじゃないのか？強いやつと戦ってそれで勝てばいいと思ってるんじゃないのか？」

「それは……」

「じゃあお前が負けた時、お前の後ろで何も知らずに守られていた普通の人たちはどうなる？……死ぬんだよ。皆。お前の生半可な覚悟のせいだな」

……しまった。調子に乗ってつい言い過ぎてしまった。俺だって楓に説教出来るほど偉くないのに。まあでもこんなもん言っておけば楽しんで戦うことはしないだろう。関東魔法協会についてしまったのは仕方ない。田舎者のおかげで俺だって詠春様に言われるまで対立の話知らなかったし……

「楓、だからといって俺はお前に今の仕事をやめると言っているわけではない。ただ、真剣に取り組めばいい。そして俺はお前側にはつけない。そういうことだ」

「……はい。じゃあ兄上は敵ということでご覧るか？」

「ん……そういうことになるな。まあ、対立して戦った場合だけ

どな。だから通常の生活まで対立しろとまでは言わないよ。流石にね」

俺は笑って楓を見る。これで俺が怒ってないって分かってくれたかな？

「じゃ、学園長。俺はこれで。木乃香お嬢様の護衛及び英語の担当はしっかりやるんで、その辺は気にしないで下さい」

「残念じゃのう……折角かの無音サイレント・キラーの殺し屋を手中に収められると思っただのにのう……」

最初からそのつもりだったな、このじじい！思考がだだ漏れだぞ！それともわざとか？俺に喧嘩売ってるのか？

「一つ聞いていいですか？」

「何かの？依頼のことなら」それは絶対にありません「やはりのう俺はぬらりひよんのポケ（いや多分願望）を軽くスルーし、自分の質問に戻る。今回はぬらりひよんも諦めがいらしく、簡単に食い下がった。

「俺の寝床はどこですか？職員寮があるとは聞いてはいたのですが、場所がよく分からなくて」

「ほっ！忘れておったわい。生憎職員寮は空きが無くてのう。ログハウスを森の中に立てておいたからそこに住んでくれ」

ぬらりひよんはそう言いながら、俺にログハウスの位置が書いてあ

る地図を差し出してくる。

大丈夫。見る限り後細工はしていないようだ。ぬらりひよんのことだ。何かしてあってもおかしくはない。

「わしも一つ聞いてもいいかの？」

「何でしょう？」

「先の大量の気と殺気は君も仕業かの？」

「ああ、はい。時間になっても楓が来なくて、でも一人で回って見つけられるような場所でもないので仕方なく・・・その事がこれ以降のことで支障を起こすようなら俺はその改善のために全力を尽くしますが・・・」

俺が申し訳なさそうに首を垂れると、ぬらりひよんはいやいやと笑顔でそれを否定した。

「悪気がなく、仕方のないことならば致し方あるまい。あい分かった。他の者にはそう伝えよう」

「ありがとうございます。学園長。では、俺はこれで。」

「では明日からよろしくのう」

「了解しました。」

第八話（後書き）

ほいほい、いかがだったでしょうか？第八話。

次回はあの人が出現します。まあ分かつちゃった人もそうでない人も次回をお楽しみに！
でわでわ、また

m この作品に対するご意見、ご感想お待ちしておりますm（ ）（ ）

第九話（前書き）

更新が遅れてすみませんでしたm(_____)m

あの後色々と試行錯誤を繰り返しまして・・・そして筆が進まなくて・・・

ですがこれからも最後までお付き合いしていただければ光栄です。

では第九話。どうぞ(´ー´)ノ

第九話

Side: 颯

俺は学園長から貰った地図を頼りにログハウスを目指す。何でも森の中にあるらしく、俺はうっそうと生い茂る木々の中をひたすら歩いている。

こんなに学校から遠いんじゃないや俺毎日通うの大変じゃね？何、俺、早速危険人物認識されてんの？いや、それとも学園長の差し金か？うん、なんかそっちの方がしっくりくる。

にわかには鋭い殺気を感じるのはおそらく気のせいではあるまい。大方ここにいる『魔法使い』の連中だろう。学園長から聞いたのかわらんが、俺が関西呪術協会からの使者ということが結構広まっているからか？いや、それとも俺がここに来る時に殺気と気出したから？

「おお、あった。へえ結構立派でかいじゃん」

俺の目に映ったのは二階建ての大きなログハウスだった。外から見ると限りはそう豪華ではないが、中に入ると見ると電気器具や生活に必要な物は大抵揃っていた。流石は私立。規模が違う。しかしコンロや鍋も揃っているということは、自炊しろ。ということなのだろう。そこまでは面倒見れんと。なるほど納得。

とりあえず今日の夕食のために買い出しに行くことにした。冷蔵庫見てもたいした物が入ってなかったし、金なら今まで依頼で稼いだ分があるので結構余裕があるし。

学園長に貰った地図をよく見ると周辺のお店などもしっかりと書いてあった。

あいつ、俺が仕事受けないのを予想してやがったな……

「っと、ここか」

俺はとりあえず生協で食料を調達する。

別にケチってるわけじゃないぞ。あとはコンビニとかしか無かったからだぞ。流石に毎日コンビニ弁当は体に悪いからな。ちなみに今日買ったのはジャガイモ、人参、玉ねぎ、肉……さあ今日のメニューは……

「兄上、今日の夕食はカレーでござるか？」

「うわっ！」

気がつくとも隣りに楓が買い物カゴをカートに乗せていた。あちらも夕食の食料調達のようにカゴの中には野菜がしこたま入っている。

「ああ、楓は何を作るんだ？」

「拙者は鍋でござる」

「鍋って今六月だぞ？今時そんなの食べたら暑くないか？」

「いやいや、兄上。以外とこの時期の鍋も美味いでござるよ。兄上も一緒にどっつでござるか？」

楓が俺の目の前に糸目を突き出し指を出してちっちつちと舌打ちを交えながら指を左右に振る。

楓それ結構古いよ・・・(汗)

「いや、俺はいいよ。それにお前一人じゃないだろ？ルームメイトがいるのに流石にいけないよ」

「じゃ、拙者が兄上の家に行くでござる。ルームメイトの二人は自分で作ってもらうでござる。それに兄上に合わせたい人もおります故」

「しかし、それではその二人に迷惑じゃ・・・」

「じゃ、兄上。七時頃そちらに行くでござるから、部屋片付けておいて下さい」

よし、今日俺は一つ学習した。『楓は決めたら曲げない(しかも絶対)』

ん？楓今、合わせたい人がいるっていったのか？

しかしそれを確認しようにもさっきまでいたはずの楓は音も無く消え去っていた。流石我が妹というべきか。ちよつと目を離れた隙にいなくなるとは・・・

はあ、仕方ない。大人しく家に帰って部屋の片付けでもするか。

俺は買い物カゴに入っている物の会計を済ませ、元きた道をただ歩いて帰るのは面白くないし、時間がもつたないので木の上を飛ん

で帰ることにした。ああ、翼は出してないよ。これはあくまでも比喻表現だから。飛ぶっていったって木と木の間を飛び越えるだけだし。

夕方ということもあってか、生徒の数も少ない。俺は内心よかつたと思う。クラスの生徒に『先生、この間生協で食材買ってたでしょ！』なんて言われたくないからな。

そんな感じで家にたどり着き、部屋の片付けを始める。まあ、片付けといっても持ってきた物が少ないし、先ほどいったように生活必需品は一通り揃っているので、買ってきた物を冷蔵庫に入れるだけなんだが……

片付けが終わり時計を確認すると五時。楓が来るのは七時。ということは楓が来るまで二時間ある。ということは暇な時間が二時間あるということだ。

この真帆良に来てからろくに体を動かしてないような気がする。あのぬらりひょんのおかげで想像以上に時間がかかってしまい、あの魔の室内から開放されたのはもう空が赤く染まっていた。

とりあえず家の周りに面倒な魔法使い共が近づかないように人払いの結界を展開し、とりあえず森の中を走り回ることにした。

以外と森の中は空気が澄んでいて気持ちが悪かった。だんだんに空は暗くなり始め星が点々と輝き始める。

都会って星とか見えないんじゃないか？はつきり見えるんだけど？

そんな感じで走り回って、ふと時計を確認するともう約束の時間の三十分前になっていた。もう、一時間半も走っていたのかと驚きつつもシャワーを浴びるため家に戻る。幸い家はそこから約二百メートルの辺りだった。

く家に帰りシャワールームく

……。流石と言うかなんというか。このただっ広い風呂場は何だ？ ログハウスだからてっきり洋風のものかと思っていたが、大きな檜の浴槽と二三個の洗い場が付いていた。俺はここに一人で住むのに洗い場が三個も必要な訳が無いだろう。真帆良恐るべし。

俺がシャワールーム……。いや、風呂場から出て涼んでいるとちよつどよくチャイムが鳴った。

うん、楓ベストタイミングだ。

俺が玄関の戸を開けると両手にさっき買った野菜が大量に入っているビニール袋を持った楓とサイドポニーという特殊な髪型をした少女が立っていた。

第九話（後書き）

はい、ということで第九話でした。

さてさて次回はいよいよあの人が登場します。また期待して待っていただければ幸いです。

では次回第十話でお会いしましょう。

第十話（前書き）

今回は楓と颯と誰かが一緒に鍋をつつきます。

ではどいぞ（＾ー＾）ノ

第十話

「兄上、来たでござるよ」

楓が両手にぶら提げたビニール袋を上に向けて見せる。

「すみません、私まで・・・」

サイドポニーの少女が申し訳なさそうに頭を下げる。なかなか礼儀正しい子だ。うん、こういう子は今なかないからなあ・・・

「玄関で立ち話もんだからとりあえず上がりなよ」

俺は楓が持っていたビニール袋を持ってやり、台所に運んでやる。その後楓とサイドポニーの子（名前もまだ聞いてない）は二人で鍋の準備をしてくれている。絶え間なく聞こえてくるまな板を包丁が叩く音がとても俺の耳には心地よかった。

よく母上の手伝いをしたものだ。俺はそんな久しぶりのほのぼのとした昔の思い出に耽っていた。そういえば楓と一緒にいてやった時間あまり無かったな。今度買い物とか付き合っただけか。あいつも女の子だし好きだろう・・・多分。

「兄上、醤油はどこでござるか？」

楓が台所のカウンターから顔だけをのぞかせている。俺は先ほど確認した冷蔵庫の中から醤油を取り出し、楓に手渡す。

「まだ出来ないのか？」

「もうちょっとでござるよ。後はもうちょっと煮込むだけでござる」

「ん、だったらこっちにコンロ出して煮込めば？ずっと料理してたから、そっちの子と自己紹介もまだだしな」

「そつでござるな。じゃあ、兄上。コンロの準備をお願いするでござる」

「了解した」

本当に何でこんなものがあるのか不思議だ。いくら私立だからといってもコンロの他にホットプレートやたこ焼きの型まである。なんとまあ、準備がいいこと。

俺が出して来たコンロの上にまだ煮えきつてない鍋が置かれる。そしてやっと楓たちが席に着いた。

「自己紹介がまだだったな。俺は長瀬颯。楓の兄で明日から麻帆良学習女子中等部で英語を受け持つことになっている」

「え……」

はいそこ、フリーズしない。

「何顔を真っ青にしてるんだよ、楓」

「いや、だって聞いてん「言っていないもん」兄上の意地悪〜！」

俺たちのやりとりを聞きちよつと戸惑っているサイドポニーの少女。俺は気にせず自己紹介を始めてくれと促す。

「はい。私は桜咲刹那といいます。楓さんとは同じクラスで、一緒に仕事もする仲です」

ありやりや・・・じゃあこの子が詠春様がおっしゃっていたもう一人の護衛か。

「あの、私楓さんにお伺いしたい事が！！」

桜咲が言った瞬間に鍋が勢いよく吹き出した。もうよろしいようだ。

「その話は置いて、とりあえず鍋を頂こう」

桜咲も俺の提案に乗り、三人で鍋を突つくことにした。この時期の鍋は結構熱かった。だがまあ、思いつきり汗をかくのもいいかもしれない。

食事をしてここまで汗をかいたのは、昔父上に無理矢理唐辛子たっぷりの麻婆豆腐を食べさせられたとき以来か。あの時は死ぬかと思つた。うん、思い出すだけでも辛い。

鍋の中身が無くなるとご飯を入れて煮詰め最後に卵でとじておじやにして完食した。スープの味付けもバツチリだった。味付け担当は桜咲だったらしく、俺が褒めたら顔を赤らめていた。

鍋の調理は二人が作ってくれたので俺が片付けをやることにした。楓はともかく桜咲がやるというて聞かなかったのだが、楓と俺の説得でしぶしぶ了承してくれた。

今度は俺が何か作ってやろうかな。

俺が洗い物を終え、リビングに戻ると桜咲が緊張の表情を浮かべて俺を待っていた。

「さっきは聞きそびれてしまいました。私は颯さんにお伺いしたい事があるんです」

まあ、大体聞きたがっていることの検討はつくが、一応聞き返す。

「あなたは・・・長から遣わされた二人目の木乃香お嬢様の護衛ですか？」

言うと同時に桜咲の目が鋭いものにかわる。その眼差しは仕事人として申し分ないものだった。

ふっ、年のわりには鋭い目をしてやがる。こつこつ目は、嫌いじゃない。

「そつだ。俺は近衛詠春様に依頼されて来た。もちろん桜咲の事も聞いている」

桜咲は少し俯いていた。理由は何となく分かる。詠春様から聞いていたが、この桜咲刹那という少女はかなり抱え込む性格らしい。悩みも、感情も全て。

「颯さんがここに来たのは私がお嬢様にふさわしくないから、なのでしょうか？」

声のトーンが先程と比べて著しく低下しているのがよく分かる。

「その事だが、長から伝言がある」

俺がそう言った瞬間桜咲は口をつぐんで目を硬く瞑った。きつと自分が木乃香お嬢様の護衛から外されるとでも思っているのだろう。

「桜咲には木乃香お嬢様の精神的な面を守って欲しい。今回俺を派遣したのは桜咲の無理を少しでも軽減させるためだそうだ」

「そうですね。私なんか・・・えっ？」

やはり自分が外されると思っていたらしく、自分の世界に思考が飛んでしまっていて俺の話しをよく聞いていなかったようだ。

「だから、木乃香お嬢様の一番の護衛は桜咲だから、どうか木乃香お嬢様の側に着いてやって欲しいとのことだ」

俺の話が終わった瞬間桜咲を取り巻く空気が緩まったのを俺は感じ取った。

「私は、木乃香お嬢様の下にいていいのですか？」

泣いているのか分からないが、少し声のトーンは戻った。

「聞いて無かったのか？お前は木乃香お嬢様の友達なんだろう？だったら友達が一番近くにいてやるのが木乃香お嬢様を守ることに繋がるんじゃないのか？」

「っ・・・しかし身分が私とお嬢様では違いすぎます！」

身分って・・・お前は何か？転生者か？しかも明治ぐらいからきたお硬い人か？

「あのなあ、いま日本は基本的人権によって身分的な差は無いの！だから桜咲がそんなに堅苦しく考える必要はないと思っぜ。ってお前、木乃香お嬢様を避けて護衛してるんじゃないだろうな？」

桜咲は顔を俯かせてしまった。
案の定というわけか。

「お前はいつも通り木乃香お嬢様に接すればいいんだ。身分の差とか気にせずにな」

「・・・はいつ！」

一拍の間は今までの桜咲の抵抗心だろう。だがその後しっかりとした声で返事をしてくれた。

「じゃそついう事で、これからよろしくな。桜咲」

俺は桜咲に握手を求めようと手を伸ばす。

「刹那でいいです。よろしくお願いします。颯先生」

俺は先生と言う響きにちょっと恥ずかしくなったが、差し出された手をしっかりと握った。

第十話（後書き）

はい、てなわけで第十話でした。

今回は2 - Aに行きます！

それではまた次回。お会いしましょう（ ^ | ^ ） /

第十一話（前書き）

さて、今回から2・Aの面々と対面します。

颯君はちゃんと先生としてやっていけるのでしょうか？

ではでは（＾＾）

第十一話

俺は今、睡魔と戦いながら学園長の前に立たされている。

あの後、刹那と意気投合した俺たちは話に花がさいてかなりの時間を費やしてしまった。結局話に区切りがついたのが11時頃。もう遅いからと二人を寮まで送りどけた。その帰りふと空を見上げたら星が綺麗だったから、ゆっくり遠回りして帰ろうなんてバカなことを考えた俺はかなり遠回りして帰った。

一番外側を歩いて帰ったためか、家に着いたのは2時過ぎだった。
どんだけ広いのよ、この学校・・・

てか、楓たちは寮に門限とか無いわけ？ああ、でもあの二人は仕事してるから別に遅くなっても大丈夫なのか？

しかも今日の支度（スーツ出したり、授業の準備したり）をしてから寝たので、実際俺が寝たのは3時頃だった。そして今朝の六時にぬらりひょんが俺に色々説明があるからと電話があり、七時にここに呼ばれたおかげで俺の今日の睡眠時間は二時間だ。

「聞いているかね？楓先生」

いつの間にか寝てしまっていたのかぬらりひょんが首を傾げている。

「ああ、すみません。俺は2-Aの担任及び英語を受け持てば良いんですね？」

俺は今出張中の高畑先生に変わり2ーAの担任となった。俺は高畑先生に会ったことが無いので、どういう方なのかは知らないが、その人のためにも頑張ろう。

英語はA組だけではなくD組とH組を受け持つ事になった。何でこんなに離れているクラスを受け持つ事になったのかは知らない。多分ぬらりひよんの憂さ晴らし？殺すか？責様。

「そうじゃ。じゃ彼女たちに教室まで案内してもらってくれ」

そんな事を俺が考えていることなどぬらりひよんは知らない。

ぬらりひよんの隣りにいたしずな先生が学園長室の扉を開けて外で待機していた二人の少女たちに中に入るよう促す。

入ってきたのは楓ともう一人は確か資料で見た・・・

「近衛木乃香や。これからよろしゅうな、颯先生」

この子が詠春様の娘さんか。結構可愛いな。京都弁も高校の時修学旅行に行った以来聞いてないから新鮮だ。そして何より詠春様に似ていない。

「よろしく」

「ああ、颯君。これを持って行きなさい」

そういつて学園長に渡されたのはクラス名簿だった。生徒一人一人の顔と部活動等が書いてある。俺は人の顔を覚えるのが得意ではな

いので物凄く助かる。

「ありがとうございます。学園長」

「じゃ兄上行くでござるよ」

楓がむすつとして俺の手を引っ張り2ーAの教室まで進んでいく。

(なんで楓怒ってるんだ？俺何かした？)

「なあ、楓先生は 楓さんの兄様なん？」

俺が楓の怒ってる理由を懸命に探していると、横から木乃香お嬢様が質問を投げかけてきた。

「あ、ああ。しばらく楓には会ってなかったから兄らしい事はほとんど何もしてやれてないけどな」

俺が楓にしてやれたことは遊んでやった事ぐらいだ。あの日の約束も果たせて無いしな。

「そうなん？でも楓先生がうちの担任って楓さん聞いたとき、ものすごく嬉しそうな顔しとったえ」

「なっ！何を言い出すでござるか！木乃香殿！」

楓が顔を真っ赤にして反論する。木乃香お嬢様が言っていることは本当のことのようにだ。

うん。素直に嬉しい。

「そうか、これからは兄ちゃんが色々付き合っただけからそう、怒るなって」

「べ、別に怒ってなんかいないでござる！」

「はははっ！楓さんがそない焦ってるの始めて見たわあ」

そんな感じで会話を続けていると2-Aと書かれたプレートの掛かった教室に到着した。

「みんなあ！新任の先生、連れて来たえ」

楓と木乃香お嬢様はなぜか後ろのドアから入った。

「何で？別に前から入れればいいじゃん。それとも何か？前から入っちゃいけないとか高畑先生から言われてるとか？小学生かよ！」

俺はそんな事を考えながら前のドアを開ける。

「！これは黒板消しのトラップか！」

こんな初歩的な罠が俺に通用するかよ……

俺は片手で落ちてくる黒板消しをキャッチ。足元を確認するとおそらく生徒の仕業であろう巧妙な（俺にとっては単純な）罠が仕掛けられていた。そのため歩いて教卓まで行くことは不可能と判断。（ここまで約二秒）そのため紐で繋がれた仕掛けを一気に飛び越え教卓の前に着地する。

あいつらが後ろのドアから入ったのはこのためか。

てか楓は俺にこんな罽が通用すると思ったのか？いや、思わなかったから言わなかっただけか。

「えー、おほん！俺は本日付けでこの2ーAの担任とA、D、H組の英語を担当することになった長瀬颯だ。これからよろしくな」

反応は無言。というかさっきの罽の一件からこのクラスは誰一人としてしゃべっていない。

何？俺嫌われた？それとも怖いみたいなレッテル貼られた？

「……か……」

「か？」

「……かつこイー……」

クラスのほとんどがはもった。このクラスの団結力ハンパねえな。クラスではもらなかったやつらは、俺を鋭い目で見てるか、興味津々の眼差しを向けるか、つまんなそうに眺めていえうだけであったが。

「ねえ先生！苗字が楓ちゃんと同じだけど兄妹なの？」

髪を二つに縛った女の子が手を上げて質問してくる。それはさっき木乃香お嬢様に聞かれたただけだな……俺は学園長に貰ったクラス名簿で確認する。

出席番号16番佐々木まき絵。新体操部。

「そつだ。ちなみに楓のござる口調は小さいときからだ」

俺がちよつとまき絵の質問に加えてやると楓にもものすごい殺気を持った目で睨まれた。

「はいはい。質問は2ーAのパパラッチこと朝倉和美を通してもらおうか！新任教師のネタは使えるからねえ」

俺はまたクラス名簿で確認する。

出席番号3番朝倉和美。報道部。

何でも有りなのな・・・この学校。てか俺をネタにすんな！

「先生は彼女とかいますかあ？」

この子は出席番号17番椎名桜子。ラクロス部。まほらチアリーダーイング。

「今のところいないな」

「じゃあ、このクラスで気になる人っています？」

今度は出席番号2番明石祐奈か。バスケットボール部ね。

「ん〜、気になるっていつでも俺が知ってるのは楓と刹那ぐらいだしな」

っていつても、楓以外はみんな昨日か今日知り合った人たちなんだけどな。

「ということ、私たちがまだまだこれからってことですか!？」

次は出席番号11番釘宮円。まほらチアリーディングね。

「かもな」

「「「おおおお!!」「」」

本当に退屈しねえな、このクラス。

「えっと、先生は何歳ですか?高校生ぐらいに見えるんですけど・
」

今度は出席番号14番早乙女ハルナ。漫画研究会。図書館探検部。

ってどんな部だ!図書館なんて探検するほどねえだろ!

「歳は18だ。だが安心しろ。学力は大学生程度はある」

なんか気づいたら後ろの席の方のえっと……出席番号25長谷川
千雨に睨まれている。

というか冷めきっている。

そんな感じで質問会は授業終了のチャイムがなっても続行された。

今年は退屈しなくて済みそつだ。

第十一話（後書き）

はい、てなわけで第十一話でした。

なんか明日菜がとつても前向きになってしまった・・・

次回も2・Aの面々とのコミュニケーションは続きます

感想やご意見お待ちしておりますm┐┌m

第十二話（前書き）

久しぶりの更新です。

ではどじご（＾ー＾）ノ

第十二話

Side: 颯

俺は一度職員室に戻り、明日からの授業の準備をしている。前に英語を教えていた高畑先生からの引き継ぎはこの前メールで済ませた。

明日は2-1-Aの英語があるのだが、成績表をみたらこのクラス最上位にいる者たちも少なからずはいるのだが、最下位付近にいる者たちが物凄く多い。まあその『クラス最下位付近にいる者たち』の中に楓も入っているのだが・・・

授業は何事も最初が肝心。いくらこの学校がエスカレーター式だといっても、このまま社会に出したら何だかまずい気がしてきたので、準備から俺にしっかりしなきゃと思ったのである。

一通り準備を終え、お茶をすすっていると、2-1-Aの生徒が職員室に入ってきた。

出席番号5番神楽坂明日菜。美術部。

「どうした？神楽坂」

「あの、ちょっと相談があるので教室まで来てくれませんか？」

「ん？話しならここでも聞くが、ダメなのか？」

「教室がいいんです！」

何か物凄く力を入れて言われた。
教室に何かあるのかな？それとも怒ってる？

俺は神楽坂の後を教室までついていく。まだ教室の場所が分からないという訳ではない。ただ神楽坂が先を歩きたいみだったので、俺が後ろを歩いている。

なんかいきなり頭振りだしだし・・・相当な悩みごとらしい。そういえば、神楽坂も『クラス最下位付近にいる者たち』の一員だったような気がする。もしかそれが原因か？

「神楽坂、相談って勉強の事か？なんなら補習見てやるぞ？」

俺はズンズン先に行く神楽坂に話しかけた。なぜかは知らないが俺はどうやら神楽坂に嫌われているようだ。さっきの職員室での態度といい今の廊下を無言で歩いているのといい・・・俺何かしたか？

「まあ、中に入ってください」

神楽坂が優しく俺に返答し、教室のドアを開けた。その光景に俺は啞然とするしかなかった。

Side：明日菜

今日は新任の先生が来た。しかも私の大好きな高畑先生の代わりに21Aの担任でしかも英語も受けもつらしい。そんな事したらただせえなかなか会えない高畑先生にもつと会えなくなっちゃうじゃない！

そんな事を考えながら私は職員室のドアをノックし、颯先生まで歩み寄る。

(しかも何で私が先生を呼びに来なきゃいけないのよ!)

私が先生の自己紹介を聞いて思考停止状態に陥っていると、委員長が

「明日菜さん。私たちは準備をしますので時間になったら先生を呼んで来てください」

と言われたのだ。私はもちろん

「楓ちゃんが行けばいいじゃない!」

と抗議した。しかし委員長によれば楓ちゃんは高いところの飾り付けがあるのでダメだという。

「先生」

私が声をかけると笑顔で先生は振り向いた。いい人なんだと思う。でも私の高畑先生の代わりってというのが・・・

「どうした? 神楽坂」

「あの、ちょっと相談があるので教室まで来てくれませんか?」

何よっ! 相談って!?! 自分で言っただけだ。

「ん? 話しならどこでも聞くが、ダメなのか?」

「教室がいいんです！」

しまった・・・怒り調になってしまった・・・

でも先生はそうかと一言笑顔で返してくれた。ああもう！私絶対先生に嫌われるよ。

てか何をこんなに私は怒ってるんだか。小学生か！私は！

私は首を振って気持ちを切り替える。

そうよ、二度と会えなくなるわけじゃ無いんだから、先生とも仲良くやらなくっちゃ！

「神楽坂、相談って勉強の事か？なんなら補習見てやるぞ？」

先生は私のさつきまでの態度を気にしている素振りは一切見せず、私に優しく声をかけてくれる。

「まあ、中に入ってください」

今度は優しく言えた。

私は教室のどうやらを開けながら小さくガッツポーズをした。

Side: 颯

「颯先生！ようこそ、2ーAへ！」

教室の中で待ち構えていたのは2ーAの生徒たちだった。手にはクラッカーが握られ、先程の掛け声と共に勢いよく破裂した。

「これは？」

「2-Aの生徒たちが先生の歓迎会を開いてくれたんですよ」

俺が呆然と立ち尽くしているとしずな先生とスーツを着ているヒゲをはやしたダンディーな人が話しかけてきた。

「僕は高畑・T・タカミチ。2-Aの元担任だよ」

「ああ、あなたが高畑先生ですか。俺なんかが先生の後を継げるか心配ですよ。いろいろと先生の授業のおっ!?!」

俺は高畑先生に笑顔で返し、俺と高畑先生としずな先生とで少々これからの2-Aの授業方針を先生らしく話し合おうと思ったら、会話の途中で佐々木まき絵に腕を引っ張られ2-Aの生徒の前に連行された。

「はい、先生。烏龍茶。ジュースがよかったです」

そう、フレンドリーに話しかけてくるのは俺を連行してきた佐々木だ。

「いや、ありがとう。佐々木」

「まき絵でいいよ、先生。苗字で呼ばれるとなんか他人行儀だし」

ん?まき絵も『クラス最下位付近にいる者たち』の一員じゃなかったっけ?そんな難しい言葉を使えるのか?

「先生、今失礼な事考えなかった?」

まき絵がジトーンとした目で俺を見てくる。

「いや、考えてん「勝負アル！颯先生！」・・・はあ、今度は何んだ？」

俺がまき絵に言い訳をしていると横から今度は中国風の話し方をした少女に腕を引っ張られ連行された。

俺を連行したのは出席番号12番古菲。中国人って本当にアルつけるんだな・・・

「だから、勝負アル！先生強いアル！だから勝負するアル！」

理屈がめっちゃくちゃだ。てか俺がまだ強いなんて分からないだろう。気だつて出して無いし、やった事と言えば今日の朝の罾の黒板消しをキヤッチして、足元に仕掛けられた罾を引っかからずに飛び越えたぐらいしか・・・

「待て待て。俺はお前が考えているほど強くない。なあ、楓？」

楓なら忍者という存在の秘匿さを知っているはず。もちろん俺が陸奥圓明流だという事も踏まえて助けてくれるはず。

俺は楓に藁をも掴む思いと目で訴えた。しかし楓の返答は、

「兄上は強いでござるよ。たぶん拙者も敵わないでござる」

かゝえ〜で〜！！お前まだ教室の事根にもつてんのか？それとも俺が楓のために英語のワーク沢山買ってきたから？

許せ。兄の愛だ。

「ほら、やっぱり強いアル！勝負アル」

古菲が両手を前に出し足を交差させる構えをとる。

（へえ、あれは中国拳法つてやつか。始めて見たな。まあかといって勝負はしないけど）

「古菲さん！何をやってらっしゃるんですか！」

俺が古菲の構えを見て関心していると、一言で戦闘状態だった古菲を大人しくさせた人物が仁王立ちしていた。

出席番号29番雪広あやか。クラス委員長。馬術部。華道部。確か雪広グループのお嬢様だったか？

頼りになる生徒の一人で成績も上位。うんうん、生徒の鏡だねえ。とくに『クラス最下位付近にいる者たち』にはあやかの爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいだ。まったく。

「先生強いから、勝負を挑んでたある」

古菲は俺との戦いも絡んでいるので、負けじと言い返す。そういえば古菲も『クラス最下位付近にいる者たち』の一員だったな。なぜかは知らんが俺を連れまわすのはそのメンバーが多いらしい。楓、明日菜、まき絵、古菲。ん？四人？一人足りんな。

後一人はたしか、出席番号4番綾瀬夕映。児童文学研究会。哲学研究会。図書館探検部。・・・なんか所属してる部活がかなり頭も良さそうな部活なのだが・・・

「今日は先生の歓迎会ですよ！？少しは場所を考えてください！

やるなら外でおやりなさい。お一人で！」

最後に一人でというもを忘れない辺り、流石というかよく知ってるな。ここはクラス替えが無いみたいだから、一年以上一緒にいるからか。すげえな。

あやかに凄まれ、委員長という立場の気迫に負けた古菲は大人しく自分の飲み物を飲んでいる。

「すまん、あやか」

「いいえ、先生。当然の事をしたまでですわ」

話し方まで俺が想像していたお嬢様だった。これはこれで嬉しいが。その後、あやかの進行により俺のために準備されたであろう出し物が次々と披露された。

麻帆良学園校歌披露から始まり、新体操、中国拳法、サーカスと中学生ではないのではないかというハイレベルな出し物だった。流石麻帆良。

出し物も一通り終わり、トークタイムになった俺は数人の生徒たちに囲まれ質問攻めになりながら、ふと刹那が視界に入った。見ると木乃香お嬢様と楽しげに話しているようだ。まだ少々堅いがこの一年間避けて来たのだから、上出来と言えるだろう。あいつの性格上。

しばし会話を楽しんでいた俺たちだったが、時間も時間ということでお開きとなった。俺は生徒たちを寮に送るため生徒たちの一番後ろを歩いていた。

「兄上、今日は楽しかったでござるか？」

気がつくとも楓が俺の横を歩いていた。

「ああ。嬉しかったし、楽しかった。こういうのもたまにはいいな。俺は友達つてのがあんまりいなかったしな」

「それは今もでござろう？」

楓がいやいな笑みを浮かべて俺を見てくる。喧嘩売ってんのかなあ？俺の妹は。

「俺だつていろいろと今までであったんだ。友達だつて数人いる」

「本当でござるか？」

「本当だ」

俺は半ば呆れ気味き答える。俺はそんなにかわいそうに見えるのだろうか？

俺は寮に全員送り届けて大好きな夜空を眺めながら、でも急いで家に帰った。

第十二話（後書き）

はい、てなわけで第十二話でした。

感想やご意見お待ちしております m ((m

第十三話（前書き）

久しぶりの投稿です

ストーリーの展開に戸惑ってなかなか筆が進まず・・・orz

更新は一週間に一度か、二週間に一度になると思います

これからもよろしく願いますm┐┌(m

ではごっご(^-^)ノ

第十三話

S i d e : 颯

俺は生徒たちを寮に全員送りどけた後星を眺めながら帰宅した。家に帰ると電話に着信を知らせるライトが点滅していた。着信の内容を確認し、俺は電話を折り返しかけた。

〜次の日〜

俺は今日の準備をし、学校に通勤するため森の中を着慣れないスーツを着ながら歩いている。家から学校までの距離は約5キロ。俺にとっては造作もない距離だが、訪問者や宅配便などは大変だろう。この山道は普通の人では少々きついかもしれない。

「先生、おはよ〜」

そう言いながら2・Aの見知った生徒たちは俺の隣を走り去っていく。昨日このクラスに着任したばかりなのにこのクラスの生徒たちは元気のいい挨拶をしてくれる。俺は何よりそこが嬉しかった。その顔はどれも明るい。うむ、中学生らしい笑顔で結構。俺は一人一人に挨拶を返しながら歩みを進める。

「まったく、なんでこう、ウチのクラスは希望に満ち溢れ過ぎてるやつらが多いんだろうな？現実を知れ。現実を」

・・・こっちはこっちで冷め切ってる。中学生らしいといえげらしいが。変なところで自分は大人だと主張する辺りとか。周りの賑や

かさについていけないクールタイプ。

愚痴を呟やいたのは出席番号25番長谷川千雨。何も書いてないところを見ると恐らく帰宅部。

「おはよう、千雨。お前はどうかやら寝不足のようだが大丈夫か？」

「・・・ああ、先生。おはようございます。いえ別に大丈夫なんです」

「あんまり夜更かしはしないほうがいいぞ。肌にもよくないしな」

俺には千雨がクラスの連中と自ら壁を作り自分でその壁で作った個室の中に閉じこもっている。2・Aという外界との関係を絶っている。そういうふうに見えた。

「どうも。じゃ、私やることあるんで」

「いや・・・」

そう言つて、千雨は早歩きで俺の元から去った。

先ほどの愚痴といい、千雨がなぜ異様なほどに仲の良い2・Aの生徒との接触をここまで拒んでいるのは興味深い事実であつた。

興味深い事実といえ、この学園が通常の人々から見れば不可解なことが多すぎるのに対してこの生徒は何も感じてはいない。というのも俺にはかなり引つかかっていた。おそらくそれはここに展開してある認識阻害のおかげだとは思つが・・・

しかし、俺はここに来てからまだ三日しか経っていない。にもかか

わらず、この不快感の多さ。いささか、関東魔法協会という団体の考え方に不信感を覚えずにはいられない。ここまできると、魔法秘匿をするつもりがあるのか。そう思えてならなくなっているのも、また事実だった。

俺は前を歩く千雨を見ながら考えだすと止まらない不信感を覚えつつ、校舎へと足を進めた。

――

ふあゝ。

俺は出てしまったあくびを手で抑えながら、しずな先生に入れてもらったコーヒーを一口口に含み教室に向かおうと出席簿と英語の教科書を小脇に抱える。

「寝不足かい？」

声のした方向には高畑先生が笑いながらコーヒーを飲んでいた。

「ええ、昨日あれから少しやることありまして、寝たのが結構遅かったんですよ」

「もしかして今日の授業のことかい？」

「まあ、そんなところです」

「君は真面目だね。他のクラスは兎も角^{ともかく}、2 - Aは大変だと思っから頑張れよ」

「ありがとうございます。じゃあ朝のHRがあるのでこれで」

「うん」

コーヒを片手に手を降っている高畑先生を背に初HR&初授業をするべく2・A向かった。

「起立っ！礼っ！」

「」「」「おはようございます！……！」」「」

「着席っ！」

本日の日直は出席番号5番和泉亜子。サッカー部MG。保健委員。関西弁という独特な口調でHRを進行していく。

今更だが、このクラスは本当に団結力があると思う。朝の挨拶がここまで揃ったのを俺は学生時代体験したことがない。流石は2・Aといったところだろう。

「連絡事項は特にない。あるとしたら、今日は一時間目から俺の授業だ。楽しみにしてるよ。あと十分で始めるから準備してくれ。以上っ！朝のHR終わり」

俺がいい終わると何人かの生徒は教科書をだして授業の準備をし、何人かは友達と雑談を始め、また何人かは食べ物売り回っている。

「しかし、教科書を出して授業準備をするやつが少ないな。この分だと予習復習なんてもっての他なんだとろっな」

俺の独り言は誰にも聞こえないように言っただつてもりだった。誰も気にしていないようだった。しかし・・・

「あの〜、先生。そうでもないんですよ」

こいつっ！人間じゃない。確かにこの教室に入った時に感じた違和感はこれだったのか。しかし年の入っている霊だな。推定で約五十六年と行ったところか。しかし髪まで白くなっているというのはどういうことだ？これは自縛霊だから容姿は変わらないはずなんだが・・・

「あの〜先生？聞こえています？やっぱり聞こえてないですよね〜。先生変な感じがしたからもしかしたらと思ったのに・・・」

『いや、聞こえてるよ。でも声に出して話すとまずいから念話でな』俺は懐から念話用の札を出し自縛霊の頭に貼り付けてやる。もちろん札には認識阻害をかけてある。刹那や楓程度には見破れないような制度で。

まだ授業開始まで時間があるしな。

『で、君は誰だ？』

俺はあくまでもクラスの様子を静かに見守っているような顔をしつつ、白髪の少女に念話で話しかけてみる。

白髪の少女は念話の使い方に戸惑い、俺に張られた札を恐れていたが念話をするための物だと説明したら安心してくれたようだ。素直だ。こういう自縛霊は頑固なのが多いのだが・・・

『私は相坂さよといいます。自縛霊を60年やってます!』

おうおう、なんかかなりフレンドリーというかハイテンションというか・・・まあ手こずらないに越したことは無いのだが。

『で、君はなぜここにいます。ここは君の居るべき場所ではない。それは分かるだろう?』

『はい。でも私、ここにいる理由が分からないんです』

前世の記憶が無いということか。それはそれで面倒だ。自縛霊は前世の目的を果たさない限りまたここに未練が残っている限り成仏することは無い。

『全く無いのか?ちょっとしたこと?』

『はい。何しろこの生活が長いもので』

さよが顔を赤くして申し訳なそうに言う。こうい^例う霊はまれだ。成仏できずにここに残っているくらいだ。よほどの強い思いがある。なのにさよはそれを忘れてしまっている。ある意味一番面倒な霊かもしれない・・・

『ふむ、じゃあ後で俺がまた来る。その時にでも相談しよう。俺はそろそろ授業の時間だしな』

『え! いいんですか? 夜の学校って結構怖いですよ?』

『俺は変な感じがしたんだろ? 大丈夫。暗いのは慣れてるし、幽霊

なんてのは目の前にいるしな』

俺はクラスの生徒には悟られないように笑いながらさよの顔を見る。さよも俺の顔を見てはいとだけ言い、自分の席に戻っていった。

なるほど。あれが出席番号1番相坂さよか。何も書いてないから帰宅部で初日は休みかと思ったが、まさか自縛霊だったとは。

俺は思考巡らせながら、そしてその思考を授業に切り替えながら教卓の前に立つ。

「さて、始めるぞ。席について教科書の16ページを開いてくれ」

俺に声をかけられ多くの生徒が急いで席に着く。

「高畑先生から聞いたがA組はどうも他のクラスより遅れ気味だ。理由は大体分かるがまあ遅れを取り戻せるように頑張ろう。んじゃ、これを誰かに訳してもらおうかな・・・」

俺はクラス中を見回す。しかし誰一人として俺と目を合わせようとはしない。それどころか誰もが指されまいと首を大きくそらしている。

そこまでそらさなくても明日菜なんて首が折れそうぐらいひねっている。ある意味この光景は面白い。

「ん〜、じゃあ千雨訳して」

「なんで私!?!」

即答。ふむ、その反応速度は0.05秒。なかなかだな。

「朝、俺に挨拶してくれたから」

「・・・っはあ！？他のみんなだつて挨拶してたじゃんかよ！なんで私なんだよ？むしろ他のみんなの方が笑顔で元気良くて！」

「うん。だから」

「あ・・・？」

「元気よく挨拶してくれなかったから」

俺が悪戯そうな顔で言うのと千雨はしぶしぶ了承した。まあ先ほど自分は元気よく挨拶しなかったと自供しているようなものだし。

対して他の2-Aのメンバーは今まで聞いたことも無かった千雨の暴言に固まっていた。

「っち！訳しゃあ良いんだろ！えっと・・・大きな木が立っていた？広島の町の道の近くに？」

千雨がしどろもどろになりながら英文法を訳していく。少々日本語がおかしいところもあるが大体は合っていたので良しとした。

その後も順調に授業は進みなんとか他のクラスとの遅れを縮めることが出来た。『クラス最下位付近にいる者たち』は頭がパンクしそうになっていたが。後で補習してやらんとダメだな。

「今日は結構進んだからな。ちゃんと復習しておけよ。期末テスト

に出すからな。んじゃ、おしまい」

数人の生徒が背伸びをし、また数人は筆箱に筆記用具をしまう。

「起立っ！」

「礼っ！」

「……………ありがとうございましたー！！」「……………」

2・Aの生徒が今度は千雨も揃って授業終了の挨拶をする。俺もその挨拶に返答をし教室を出る。

『刹那、楓。今日の0:00に2・Aに来い』

俺は教室から出る間に刹那と楓に向けて念話を飛ばす。

『はい』

『承知したのでござる』

素直に返答した二人の顔を横目に見ながら、今度は本当に教室を出た。さよのことも紹介したいし、聞きたいこともあるしな。

俺が教室を出た時太陽はまだ空高く上がったばかりだった。

第十三話（後書き）

はい、てなわけで第十三話でした。

次回はちよつと急展開！？

お楽しみに

感想やご意見お待ちしております m ((m

第十四話（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんorz

最近テストが立て続けにありまして・・・

本当、こんなに沢山テストいらない！社会に出たってこんな使わないじゃん！

みたいな（笑）

それじゃ、本文をどうぞ（^ー^）ノ

第十四話

S i d e : 楓

正直言つて、兄上の授業は結構分かりやすかった。拙者でも分かるように簡単な例を出して説明してくれたからだと思う。これならば、脱バカレンジャーも夢では無いのではないかと思えるほどだった。

兄上の授業の良さに關心しながら授業を聞いていると、いつもは長く感じられる授業も今回は早かった。気がついた頃には授業終了のベルが鳴り、兄上が教室から出るところだった。その瞬間発した念話で0:00に教室に呼び出された。

大体念話を使う辺りで仕事の話だということは分かっていた。授業や自分の成績に関することなら別に別にみんなの前で言えばいい。それに念話の秘匿性がかなり高かったというのも、理由の一つ。あれなら真那でも傍受は難しいと思う。

「楓姉、食べないの？」

気がつくくと拙者のことを風香殿が心配そうな顔で見上げている。いつの間にか食事中に思考が今日の呼び出しのほうに飛んでいってしまっていたようだ。

「いや、食べるでござるよ」

拙者は双子の姉妹に微笑みかけた。拙者の顔を見て安心したのか、また『身長をどうやったら楓姉のように大きくなれるのか』という

議題に集中していった。拙者はその二人の会話を横目に見ながら今日の前にある夕食を片付けた。

その後拙者は二人と共に入浴し、床についた。現時刻10:00。まだ予定の時間までは二時間もある。かといってここで寝てしまうと起きられないような気がしていたので、一足先に教室に行つて兄上を驚かせてやろう。そういう思考に至つた。

暗闇が支配する夜の学校。普通の女子高生ならばまず嫌がるし、肝試しには持つて来いのシチュエーションだろう。しかし拙者は忍。暗闇で目を慣らすのは朝飯前。この訓練は兄上と共にした懐かしの技術でもある。

（11年前）

「兄上、見えないでござるよ！どこにいてござるか？」

あれはまだ拙者が三歳になったばかりの頃。兄上が陸奥の修行に行くちよつと前の話。

拙者は兄上に連れられて夜の山に入った。何でも兄上が見つけた秘湯があるというので皆で入りに来たのだが、兄上の手をうっかり離してしまい暗闇に巻かれた拙者は身動きがとれなくなっていたのだ。

「ふふふ。楓、無理に暗闇で物を見ようとすな。落ち着いて一度目を閉じてみる。そしてゆっくり開くんのだ」

どこからか兄上の声がした。たぶん兄上には拙者は見えている。だけど自分には見えない。それが悔しかった。拙者は一度深呼吸して

心を落ち着かせ、そっと目を開く。しかし、

「やっぱり見えないでござるよ!」

兄上の助言通りにやったはずだ。いま心は落ち着いているはずだし、ゆっくり目を開いた。なのに見えない。兄上は出来ているのに自分には出来ない。やっぱり悔しい。

「そりゃあな。誰も初めから出来る人なんていないさ。俺だって三日はかかったしな」

「兄上でも?」

「ああ。父上に怒られながらな」

そっか。兄上でも一回で出来なかったのか。そう思うと今までの焦りがゆっくりと引いていった。もう一度拙者は目をゆっくり閉じ、ゆっくり開いた。

「見えた!兄上!見えたでござるよ!」

兄上は目の前の木に寄りかかっていた。気づくと父上や母上もいる。

「父上、母上も!」

「ふむ、ちゃんと見えているようだな。上等だぞ、颯」

父上が兄上に拙者が暗闇を見ることが出来るように訓練するのをもとより言われていたらしい。

「この技は『闇見』。暗闇で仕事をこなすことが多い我々忍にとつて一番大切といって良い技だ。この技は心に迷いがあると使うことは出来ない。それでお前が一番信頼している颯に頼んだんだ」

父上が笑いながら拙者の頭を撫でた。兄上はその隣でよく出来ました。と褒めてくれた。母上はただ何も言わず笑っていた。

その後は兄上の見つけた秘湯に入った。あの技を会得した時に秘湯なんて無いのではないか。そう思っていたが、秘湯の件は別だったらしい。湯加減はなかなかの物。兄上が温泉好きなだけあって最高だった。

その二週間後に兄上は陸奥の修行に行ってしまったのだが・・・

〈現代〉

「懐かしいものを思い出したでござるな。まあ、たまには思い出に浸るといっても良いでござるが」

拙者は長い廊下を歩きながら独り言を漏らした。誰にも聞かれないようにひっそりと。

そして到着した2・Aにはいつもの賑やかさは無く、シンと静まり返っていた。こんなに2・Aが静かなのはテストの時か、誰もいない時しかない。授業中はAlwaysうるさいのだ。

現時刻10:30。ここに来るのに電車を使わなかったしゆつくりと兄上の好きな星を眺めて来たので意外と遅くなってしまった。しかしまだ一時間三十分前。あの勤勉な刹那ですら見えない。当然兄上の姿も見えない。やはり早すぎた。しかし好都合。兄上を脅かす

には。

最近兄上が拙者にかまってくれなくて他の人には絡んでいるように見える。今朝だって千雨殿と登校してきたみたいだし。昨日の歓迎会だってまき絵殿やくうふえいと共に何やら楽しげであったし。

拙者はプウツと誰もいない教室で一人頬を膨らませた。

「楓。闇見は使いこなせてもまだまだ人の気配を読むのは苦手らしいな」

声のした方向に体を向ける瞬間にクナイを飛ばす。

「その判断は合格。だけど反応が遅い」

後ろを確認するとやはり兄上だった。聞き知ったその声から誰だが予想はついていたが一応警戒は解かない。それに相手の肩を狙ったので相手を殺すことはない。

兄上は拙者が投げたクナイを持って拙者との距離を縮め首元にクナイを押し当てられた。ひやりと冷や汗が背中を伝ってくるのを感じた。ここまでの時間兄上が話し終えてから約0.02秒。

「やはり兄上でござるか。早いでござるな。まだ待ち合わせ一時間前でござるよ?」

拙者は降参の印である、両手を上に上げるポーズをとる。兄上もそれに応じてクナイを拙者の首元から引き、拙者の手のひらに乗せる。

「ああ。俺はギリギリに来るのは嫌いなんだ。普通三十分前には待

ち合わせ場所に行くようにしている」

「え……でもまだ一時間前」

拙者は兄上がどうしてこんなにも早く学校に来ているのか分からなかった。いくら自分が呼び出したからといっても一時間前に来るのは早すぎる。兄上がそんなに生真面目にも思えないし……

「まあ、俺も色々忙しいんだよ。今日着任したばかりだから片付けにやならん書類がいっぱいあつてな。どうせならと思つてここに持つてきてやつてたんだよ」

どうしてだろう。普段はなかなか見破れない兄上の嘘が今日は簡単に見破れる。拙者が兄上の嘘を見抜けたのは数回。それも毎回決まつて友人関係。

私たちは山奥に住んでいたせいか、友達が小さい頃から少なかった。兄上は公立の学校に小中高と通っていたが、あまり友達はいなかったようだ。なぜ拙者がそれを知っているかというと、爺様が父上に当てた手紙の中にそう書いてあつたのを父上が教えてくれたからである。

兄上はそんな自分を見せたくなかったからか口には出さなかったらしいが、そんなのは忍一家である父上や母上、武術家である爺様が見抜けぬわけも無く、兄上の努力虚しく、現状は筒抜けだった。

おそらく今回もそんな理由だろう。

「兄上、この真帆良に仲の良い方でも出来たでござるか？」

案の定兄上は目を大きく見開いていた。分かりやすいんでござるよ。兄上は。こういふことに限ってでござるが。

「なんでこういふ事は楓とか父上とか母上とかにはばれるんだろうな？」

「分かりやすいからでござる」

拙者は兄上の質問に一言で返す。その返答の短さに少し頭をたれる兄上。

滅多に無い兄上をいじめるという楽しい時間は突如として破られた。

「早いですね、二人共。まだ待ち合わせ二十分前ですよ？」

刹那が到着。しかも時間帯も兄上が予想した通りに。

兄上と賭けをするのはやめよう。絶対に負ける。

拙者はこの日また一つ学んだのだった。兄上にはいけない事を
・
・

第十四話（後書き）

はい、てな訳で第十四話でした。

今回はちよい昔話でした。いきなりクナイを飛ばしてくる妹。それを対処する颯。忍ってこわいなー

次回はこの話の颯視点です。

この作品の感想、ご意見お待ちしておりますm()m

第十五話（前書き）

今回は前回の颯目線です。

さよもちょっぴり出演。

そして颯の恥ずかしい過去もちょっぴり？

では第十五話。どうぞ（＾ー＾）ノ

第十五話

SIDE：颯

俺は少し早めに2 - Aに来てさよとの会話を楽しんでいた。

さよの話は結構面白かった。聞いたところによると、2 - Aの生徒で予習と復習をしているやつはやはり少ないそうだ。ではなぜあの時あんな事を言ったかというところ、予習、復習なんてするはずも無い2 - Aのメンバーがしていると言えば、振り向いてもらえると思うたからだそうだ。

あとは超鈴音と四葉五月が毎日休み時間になると売っている肉まんは毎年学園祭でも大人気商品らしいということ。委員長のあやかと明日菜との喧嘩は賭け事になっていてこの2 - Aでは恒例行事だということなど等。

それとエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと茶々丸がずっとこの2 - Aにいますという興味深い話も少し戸惑いながらしてくれた。

さよの話聞いて俺がこの真帆良学園に対する『興味深い事実』がまた増えてしまった。エヴァンジェリンと茶々丸の件はのちのち調べる事として、さよの話聞いてもさよが成仏できるような要素は無かった。しかし唯一の救いはさよがこの真帆良の生徒だったということを覚えていたことだ。ここの生徒だったのなら図書館にある卒業文集を調べれば分かることだ。しかし六十年前となると残っているかどうか・・・まあ馬鹿でかい図書館があるみたいだし何とかなんだろ。

それとさよが興味深い話をもう一つしてくれた。

「あのですね、これは先生に言っても良いのか・・・」

さよが今までハイテンションで話していたのだが、そのテンションは一気に沈み、不安そうな表情を浮かべていた。

「いいさ。話してみる。たいがいの事じゃ俺は驚かないぜ」

さよは俺の返答を聞き、少々悩んでいたが少しずつ静かに話し出した。

「每晚・・・という訳ではないんですが、でも結構頻繁に爆発音とか振動とかがこの学校に響いてくるんですよ。私は自縛霊といってもこの真帆良学園の中等部は動き回れるんです。それでこの間怖かったんですが音の下方向に興味本心で行ってみたんです。そうしたら・・・」

そこでさよは一度息を吞んで話を止めてしまった。まあ大体さよが見たものは想像がつく。侵入した人か魔物を見たか。それと退治している人が知り合いだった。そんなところだろう。

「そこに、大きな鬼が・・・いたんですよ。信じられないでしょう？」

やはりな。というより見てしまったか・・・まあ認識障害や人払いがあくまでも対人用。対幽霊用にはなっていない。聞かないでこれらの札をすり抜けてしまったか。

「・・・いや、信じるよ。そうか。見てしまったか」

「先生はあれが何だか知ってるんですか？」

俺は正直迷った。あんな存在をってしまったさよ。だが自らこちらの裏世界に入り込んできては欲しくない。こちら側にいるのは我々宿命付けられた者たちだけで良い。しかし知ってしまった以上教えないわけにもいかない。俺はさよが見たであろう鬼の正体について明かした。

「そう、だったんですか・・・。先生は何でそんなことを？」

「まあ、いろいろとな。こういうのが好きで、昔色々調べたんだよ。それでお前はどうしたんだ？」

俺の正体を明かすわけにもいかないしな。

「あちら側も私のことが見えてなくて気づいてもいなかったようだったので急いで文字通り飛んで帰りました」

「そうか。でもあんまりそういう場所には行くなよ。何が起こるか分からないからな。いくらお前でも気付かれる場合がある」

一応念には念を入れておいて損は無いだろう。さよがいくら存在感の薄い霊だと言っても、とばっちりを喰らいかねない。危険な場所には行かないに越したことはない。

「分かりました。今日はありがとうございました」

俺はさよに見送られ2 - Aの教室を出た。しばらく気配を消してさ

よの様子を見ていると自分の席についてすぐに寝息を静かに立てて寝てしまった。そうとう力を使っていたのだろう。自縛霊にとって話すという動作はかなりの霊力を使う。

俺はお前を楓と刹那に紹介したかったのだが・・・まあしょうがないだろう。

まだ楓たちが来るまでは幸い二時間はある。さよがもうこんな思いをしないように体幽霊用の認識障害と防音結界、防振結界用の札製作を始める。

結構これが疲れる。普通対人用に製作されている札に無理矢理、対幽霊の項目を上書きするのだ。結構法則を無視しているから気も使う。

そんな無理矢理札を教室の周りに貼り付ける。もちろん人の目に入らないように天井に貼ったり、まあ色々だ。多分気付かれないだろう。

そんな試行錯誤を終え、一息ついているとまだ時間まで一時間十分ある。にもかかわらず我が妹が到着。早過ぎんだろ・・・お前。

俺は教室から一步下がって楓を見守る。流石にこの暗さだと闇見を使わないと見えない。しっかりと歩いているところを見るとちゃんと使えているらしい。

しかし昔から楓は人の気配を読むのが苦手だった。今も俺のことを気付かずにいる。まあ俺のことを気付けるやつなんていないと思っ
がな。

「楓。闇見は使いこなせてもまだまだ人の気配を読むのは苦手らしいな」

俺が声を発すると、振り向きざまにクナイを飛ばしてくる。

ふむ、流石に動きが良い。父上が絶賛するのも分かる気がする。

「その判断は合格。だけど反応が遅い」

俺は飛んできたクナイを右手で掴み、瞬動を使い楓の首元にクナイを当てる。頸動脈ぴったり。対して楓も警戒心は解かずにいる。

楓は両手を挙げ降参を意を示す。引き際も心得ている。ふむふむ。ますます興味深くなってきた。

「やはり兄上でござるか。早いでござるな。まだ待ち合わせ一時間前でござるよ？」

俺はお前にそっくりそのままそのセリフを返してやりたいよ。俺は元々さよと話すために早く来ていたわけだし。

「まあ、俺も色々忙しいんだよ。今日着任したばかりだから片付けにやならん書類がいっぱいあってな。どうせならと思ってここに持ってきてやってたんだよ」

とりあえずいい訳をしておく。人はこれを嘘と呼ぶ。

まあでも大丈夫だろう。楓は忍としては上出来だが意外と鈍いし、策略方面でも俺より劣る。それに少々天然でもあるし、見破られまい。

「兄上、この真帆良に仲の良い方でも出来たでござるか？」

そう高をくくっていた。俺があいつに嘘がばれた事はない。．．．
いや、ちよつと待て。前にもこれと同じフレーズがあったような．
．思い出したっ！

あれは俺がまだ陸奥の修行をしていた頃。修行の合間を縫って公立の中学校に通っていたがなかなか友達が出来なかった。いや、出来なかったんじゃない。作らなかったのだ。友達なんて無駄。自分がここに通っているのはあくまで勉強のため。友達と馴れ合うためではない。そう思っていたからクラスの連中にも話しかけるようなことはしなかった。

しかし、俺をそうはしておかないおせっかいなヤツがいた。小学校から一緒に一応顔は知っていた。だが俺もあいつも話しかけるなんてことはしなかった。しかしあいつは中学に進学した途端に俺に絡んでくるようになった。俺は質問には答えてはいたが、自分から会話を発展させる事はなかった。

しかしそんなあいつを見て自然に人が俺の席の周りには集まるようになっていった。時たま女子も顔を出し、昨日のテレビの話や人気の歌手の話を俺にしてきた。俺は一応知らないそれらを適当に流していた。

俺が友達を作らなかつたもう一つの理由。それはみんなの話に混ざる事が出来ないから。学校から帰ると辛い修行が毎日続く中、テレビや雑誌なる物を見ている時間は無かつた。

しかしあいつは小学校から俺を見てきてそれに気付いたそうだ。た

だ見てるだけでよく分かるな。俺はそれらの事は適当に話をあわせ
ていたのに・・・

後から聞いてみると

「分かりやすいんだよ、お前は。お前と話していると意外と知ってる
ように感じるが実は違う。俺たちが話している事を頭でまとめて推
測で話してんだろ」

そう言われた。それは確かだった。こんな素人に見破られるようで
は忍失格ではないか。俺はそう思ったがあいつはまたこう続けた。

「自分を着飾んな。小学校から見ててお前の事は俺がよく知ってん
だよ」

あいつは悪戯そうな笑みを浮かべながら言った。俺はあの日から友
達になったんだ。友達ってのも良いものだな。そう思わせてくれた
張本人だった。

その日の修行中俺はじっちゃんにいつもの気迫が無いと怒られた。
だがそれと同時に笑ってよかったなと言いやがった。

その後手紙で皆から『よかったな』の一言が書かれた文。分からん。
なぜばれた。

「なんでこういう事は楓とか父上とか母上とかにはばれるんだろう
な？」

俺は苦虫を噛み潰したような顔で楓を見る。

「分かりやすいからでござる」

いつか聞いた事のあるようなセリフを聞き俺は溜まらず頭をたれる。

その後も散々俺の分かりやすかったことを言われ半分泣きたくて帰りたいたいと思っていたところに救世主が登場。

「早いですね、二人共。まだ待ち合わせ二十分前ですよ？」

刹那が到着。しかも時間帯も俺が予想した通りに。

今度は賭け事が何かして楓を泣かしてやる。

S i d e o u t

兄弟の思考は全く持って正反対の方向性を向いていたのである。

しかし刹那は助けられた救助者のような顔で自分を見てくる楓と、恨めしそうに見てくる楓。この二人に何が起こり、自分が何をしたのかは分からずに気まずいことに来てしまったなと自分を責めるのであった。

第十五話（後書き）

はい、てな訳で第十五話でした。

次回は刹那目線です。

また次回第十六話にてお会いしましょう
では（、、、、）ノ

第十六話（前書き）

今回は刹那サイドです。

楓が本当はメインヒロインのはずなのに刹那が多くてすみません。

r z

ではごっご (^ - ^) ノ

第十六話

Side: 刹那

私が2 - Aに着いたときにはもうすでに颯先生と楓は到着していた。さらに二人の間に何かあったようで颯先生は涙を流しながら助けを私に求めて来た。その姿に楓は少し妬いているように私には見えた。私は颯先生を慰めながら楓に訳を聞くが、教えてくれなかった。いったい何があったんだ？

「一反乱あったところで刹那には申し訳なかったと思うが本題に入らせてもらおう」

颯先生が一度ため息をつき、話題を真剣んな物に変える。私たち二人も今までのおちゃらけた雰囲気や空気が痺れるような緊張したようなもの変わる。

「さて、俺がここに二人を呼んだのはまずこれを木乃香に渡して欲しかったから」

そうして颯先生が私に差し出したのは十字架のペンダントだった。女の子ならば誰でも欲しがるようなピンクとシルバーという可愛らしい配色の装飾がしてあった。

「先生、これは？」

「俺が昨日夜なべして作ったロザリオみたいなもんだ。木乃香お嬢様が身の危険を感じた時一定以上のストレスが脳にかかる。これはそれを感知し、俺がその情報を受け取る。まあ、そういうシステム

だ。でも普通にロザリオとしての効果も組み込んであるから一応魔除けにもなる。少し小さめだから効果は薄いかな」

颯先生は一通りロザリオの説明をする。私は『ロザリオ』という物を見るのは初めてだった。ロザリオとはキリスト教の拝礼の際に使う物らしい。

というか、颯先生のイメージ的にロザリオよりは数珠の方が合っていると思う。

私はそう思いながら密かに微笑を漏らした。誰にも気付かれないように。

「分かりました。明日の朝木乃香お嬢様にお渡ししておきます」

私は返答しながら颯先生から差し出されたロザリオを受け取る。

「拙者は何のために呼ばれたのでござるか？」

楓が怒っているのが口調で分かる。仲が良いのか、悪いのか。おそらく良いと思うのだが、今は喧嘩中のようなのだ。

しかしなぜだろう。この二人のやり取りを見てみると自然と笑顔になっってしまうのは。私は姉妹がいなかったし、仲が良い友達も木乃香お嬢様が初めてだった。そうそう口喧嘩などした事がない。

だからだろうか。うらやましいと思ってしまうのは。

「そう怒るなって。俺としてはこちらが本題だ。もちろんこちらにも刹那は関係あるからな」

「はっ、はい！」

私は一人思考に浸っていたためか、気合の入った返事を返す。それに颯先生はそんなに気を張り詰めなくても良いんだぞと笑っていた。私はそれに顔を赤くした。それに颯先生はまた微笑をもらった。

「俺が二人を呼んだのはここにいる理由を聞こうと思ってな」

「それはどういう意味ですか？」

私がここにいる理由なんて決まってるじゃないか。木乃香お嬢様がいるから。お嬢様がいる所ならば私は地獄の底だつてついていく。木乃香お嬢様は私にとってそれ程のお方だ。それをなぜ今更。

「刹那。お前は詠春にお仕えしているにもかかわらず、なぜ敵地である関西魔法協会に籍を置いている」

「それは、学園長が木乃香お嬢様の御爺様であるからです」

「だから、木乃香にも危害は加えられる事は無いと」

「はい」

無論だ。学園長がそんなことするはずがない。

「……。偽善者の考え方だな。お前、自分のクラスを見て何とも思わなかったのか？」

私は颯先生に偽善者と言われたことに少々怒りを覚えつつも先生の

質問を考える。

「2-Aですか？確かに楓や私や真名のように裏に通じている者が多いですが・・・」

「それだけじゃない。俺が調べたところによると大学の研究に携われる程の頭脳明晰人、武術の達人、幽霊、これが何を示すかわかるか？」

颯先生が上げた例は言われてみると確かに不自然な点が多かった。

揃い過ぎている。私もそう思った。

「木乃香殿に何か差し向けている。そういうことでごさるな」

今まで黙っていた楓がいきなり参戦してくる。今まで何も言わなかったのは、おそらくその事を考えていたからだろう。

「大まかだが正解だ。大方、裏方の連中を集める事によって木乃香お嬢様を裏の世界。つまり魔法に関わらせることが目的だろう」

「なるほど。そういうことでござったか」

楓は糸目を緩めて笑う。楓は仕事になると頭が冴える。通常の勉強はさっぱりなのだが。

「学園長が・・・」

私は今まで信頼してきた人に裏切られたようで頭を強く打ち付けられたような錯覚に陥る。

「昨日詠春様から連絡が入ってな、くれぐれも木乃香お嬢様を裏の世界にはかかわらせないで欲しい。少なくとも必要とされるまではこのことだった」

そんな私を気にせず颯先生は話を進めていく。

「俺としては、詠春様に対して講義したいのは山々だが今は詠春様の考え方を俺は尊重したいと思う。それに詠春様もあまり学園長に對してあまり良い印象を抱いていないようだしな」

え・・・？詠春様も？ではなぜ私たちを麻帆良に？

訳が分からない。これでは私たちはこちらの・・・

「人質みたいだ」

「えっ！」

「そう思っただろっ？」

颯先生は意地悪そうな笑みを浮かべている。私の考えはすでに颯先生筒抜けのようだ。

「はい・・・」

「正解だ。つまり学園長は長の思念とは反対の方向に事を動かそうとしている。おそらくは関東魔法協会の権力保持のためだとは思わが。そんな奴の下でお前たちは何を？木乃香を守る？人々を守る？無理だな。このままでは2-Aの生徒は少なからず魔法の存在

に気づかされる事になる」

颯先生の言葉に私は何も言えなかった。楓も思い表情を浮かべている。

「それはお前たちが一番避けたい事態だろう？」

「はい」「そうでござる」

もちろんだ。私たちがここにいる理由。それは大事な木乃香お嬢様やクラスの間を守ること。これが大前提だ。

「そこでだ。その事態を避けるためには関東魔法協会との縁を切ることが俺は最善策だと思う」

「待って下さい。それでは私たちはこの麻帆良を去ることに！」

私が思い余って颯先生の話の途中で割り込み反論する。

「話は最後まで聞け。ここを辞めることは長も望んではない。つまりだ。関東魔法協会とは縁を切り、本来のかたちである関西呪術協会の使者としてここを見張る。木乃香お嬢様の護衛も含めて。そうすれば関西呪術協会だけが肩身の狭い思いをしなくて済む」

なるほど。関東魔法協会は私たちが見張っているから今まで通りに好き勝手出来ない。何かあれば魔法秘匿思念の低下を訴えればいい。

「うむ、それなら拙者たちも今まで以上に動きやすくなるでござる

「しかし、そうなるここへの侵入者への対応が難しくなるのでは

「？今までは学園長からの要請を受けて動いていましたし」

「私たちはこの学園に侵入して来るものを感知することは出来ない。そもそも学園長がどうやってその情報を得ているのかも分からない。」

「その辺は大丈夫だ。俺がこの間学校の周りに探知用の結界を展開しておいたから」

「流石準備が早い。いつそんなの張ったんだか。この学園無駄に広いの。」

「で、どうする？俺の計画にのるか？」

「のるでいける」

「早っ！楓もう少し考えてから答え出せよ。一応今まで従ってきたんだから。」

「一応、理由を聞いておこうか」

「拙者がここにいるのは、クラスの仲間だけじゃなくて麻帆良にいる人を守ることでござる。それが今のままで出来なくて、危険な方向に進みそうなら拙者は安全で信用性のある兄上の計画にのるでござるよ」

「楓は笑顔でそう言った。颯先生もそれを聞いてそうか、とひとこと言っただけだったが顔は嬉しそうだった。」

「刹那はどうする？」

そんな笑顔の余韻を残しながら颯先生は私に質問をふる。

・・・正直言つて私は颯先生の考えに賛成だ。そっちの方が確実に
お嬢様やクラスの間を守れるだろう。なら私はなぜ迷っている。
今まで従つて来たからか？今までお世話になつたからか？それとも
お嬢様のお爺様だからか？いや、違う。もっと別の・・・

(ルルルル!!!)

私が颯先生の返答に悩んでいると携帯の着信音がなつた。誰もいな
い教室ではそれがよく響いた。

「はい」

私は短く応答する。こんな時間にかかつて来る内容なんて、たかが
知れている。

「わしじゃ、こんな時間にすまんが楓君と一緒に世界樹の前まで来
てくれんか？緊急事態での」

噂をすればなんとやら。私は兎も角楓はもう既に颯先生の計画にの
っているのに・・・

「楓と二人で世界樹の前まで来いとこの命令です」

「仕方ないな。刹那の返答は後日聞くとしよう。取り敢えず行つて
来い。不信がられては困るしな」

「分かりました」

次聞かれた時は直ぐに答えを出せるようにしよう。このもやもやをしっかりと拭い去って。

私と楓は武器をもち教室を出た。

第十六話（後書き）

はい、てなわけで第十六話でした。

感想、ご意見、お待ちしております m ((m

第十七話（前書き）

今回は原作キャラが登場して、急展開！？

では、どござい（＾ー＾）ノ

第十七話

Side: 颯

昨日詠春様から留守電が入っていた。俺は詠春様に電話を掛け直し今の状況を報告した。

「お義父さん・・・いえ、関東魔法協会の長は木乃香に魔法を教えようとする確率が高いんです。くれぐれも木乃香にはばれない様にして欲しいんです」

と言われた。それに対して俺は反論を試みた。

「お言葉ですが長、それはいささか無理があるのでは？木乃香お嬢様は後々関西呪術協会を率いていかれるお方。そのお嬢様が魔法の存在を知らない様では・・・。それにあの魔力の量からして限界があると思のですが・・・」

俺の長い反論に詠春様は確かにそうなんです、とまた反論された。

「私も一生木乃香が魔法の存在を知らずに生きていくのは無理だと思っっています。木乃香の魔力は東国一とも言われる程の魔力量です。だから学園生活だけでも、木乃香には出来る限り普通の女の子として生活して欲しいんです。裏の世界という修羅場に足を踏み入れるまで」

反論を返された俺であったが、詠春様の意見にこれ以上反論することとはなかった。

「分かりました。最大限努力いたします。しかし万が一知られてしまった場合にはどうしますか？」

問題はここ。いくら配慮しても追いつかないところもある。一日中木乃香お嬢様についているわけにもいかないし。

「・・・その場合は全て話してあげてください。もちろん魔法というものがただ綺麗で便利という事だけでなく、人を殺す凶器にもなりうるという事も」

そのくらいの覚悟はしている。そう言いたげな声だった。

「承知いたしました。そうならない様努力いたします」

「頼みます。何かあったら連絡を」

「はっ！」

そうして俺と詠春様との真夜中の会議は幕を閉じたのであった。

—————

詠春様の話と今まで自分で入手した情報から考えて麻帆良学園学園長兼関東魔法協会会長、近衛近右衛門という人物はどうやってでも孫を危険な裏世界に連れ込みたいらしい。

そこで俺はロザリオを作った。俺や刹那が見ていない時に木乃香お嬢様にもしもの事があった場合直ぐに対応出来るように。

しかし正直言っであのロザリオを作るのは大変だった。俺の右手に

宿っている幻想殺^{イメージブレイカー}して札の効力とロザリオの効力を消してしまわないように、左手だけでの作業となったからである。

まあでもそのかいあって、仕上がりは結構上出来だ。外見も女の子が好みそうな配色にはしてみた。これを今時の中学生が好むかどうかは俺は知らん。

でも、刹那の反応を見る限りは大丈夫そうなので安心した。

問題は刹那と楓がそのまま関東魔法協会に居続けるのかということだ。

強制ではないが出来る事ならば関東魔法協会とは縁を切り、関西呪術協会の方に戻って来て欲しい。そう思って二人を呼んだ。

本当は俺の家に呼んでもよかったんだが、俺の家は場所が分かりにくい上にかなり険しい道のりだ。まあ、二人とも後者の方は大丈夫だと思うが……

教室だったらさよもいるし、折角だから紹介しようと思ったのだが話すという行為は、予想以上に霊力の消費が早くさよが寝てしまったのでそれは叶わなかったが。まあ仕方ないだろう。

「お前たちがここにいる理由を聞きたい」

この質問に刹那がきちんと答えてくれるように俺は必死で学園中を走り回った。

何せこの大きさだ。麻帆良にもともと張ってある感知用の結界を元にしながら俺の感知用結界をニキ口先に展開した。

これによって俺たちの方が学園よりも早く情報を得る事が出来る。俺たち、関西呪術協会の方が関東魔法協会よりも早く奴らの拠点地でもある麻帆良学園を守ったときちゃあ、彼奴らの面目は丸つぶれだ。

そうなれば魔法世界からの信頼も著しく傾くだろう。その場合関東魔法協会はそちらの回復を優先に進めるために木乃香お嬢様にはしばらく手は出さないと。

うむ、我ながら見事な戦略。

ん？この反応は・・・

「で、乗るか？」

俺はそっちは取り敢えず除外して本題に戻る。

「乗るでござる」

楓は速攻賛成。まあ、あいつはあいつで考えているとは思うがもう少し考えてからにしようぜ。我が妹よ・・・

「んで、刹那はどうする？」

「私は・・・」

刹那は流石に迷っているようだ。まあ今まで一緒に戦ってきた仲間を裏切るんだ。そうなるだろうな。

ルルルル！！！！！

やっぱりな。出来は上々。しかも俺の方が早い。

「・・・はいっ！先生すみません。要請です。楓と」

「行って来い。終わったら返事、聞かせてもらおうぞ」

俺の言葉に刹那は無言で頷き刀を持って教室を出て行った。

「刹那はまだ迷っているようだが、まあいい。今回の戦いで刹那は知る事になる。学園長が信用ならない奴でこっちの魔法使い共はお前をよく思っていない。という事をな」

俺は一人教室で呟きながら窓の外に輝き続ける星々をみる。

星は変わらず空で輝き人を魅了し続ける。それなのに俺たち人間はたいした魅力も無いくせにその神々しい光に照らされた大地で醜い戦いを続ける。

人はなぜ争う。

欲しいからだ。

何が？

星のような全てを魅了する力が。

手に入れたいからだ。

何を？

真つ暗なステージで光り輝く権利が。

「出て来いよ。俺が気づかないとでも思っていたのか？エヴァンジエリン・A・K・マクダウエル」

俺が振り向き教室の入り口に目を向けると金髪の少女と背の高いガノイドが現れ、その姿が差し込んでいる月明かりに照らされる。

「！気付いていたのか！気配は消していたつもりだぞ！」

エヴァンジエリンが以下にも不服だというような顔で殺気を飛ばして来る。

「俺は気配を探るのは得意なんだよ。職業上な」

「いいのか？身の上をそうも簡単に明かして」

「大方俺が学園長の誘いを断った時点でお前に俺の監視を命令したんだろう。だとしたら俺の素生もしっかりと把握しているはずだ」

「流石は無音サイレント・キラーの殺し屋だな」

金髪の少女は不敵な笑みを浮かべている。

「ならばなぜ殺さない。分かっていたならば、私に気付かれず近付き私をを殺すことも出来たはずだ」

金髪の少女は一步步つ俺の方に歩み寄りながら険しい顔に戻り殺気

を飛ばしながら続ける。

対して俺は何も言わずただ静かにエヴァンジェリンと茶々丸の顔を見ていた。

「なんせ私はお前たちのさっきの話を聞いていたのだからな。この情報があいつの元に渡ればお前たちの作戦は丸潰れだ」

金髪の少女は不敵な笑みを浮かべたままある程度の距離を取って俺の前に立った。

「ダイク・エヴァンジェル闇の福音とやるつもりはない。殺さないのは理由がある」

「何だ？この吸血鬼の真祖であり悪の魔法使いの私と取引でもするつもりか？」

エヴァンジェリンは先程とは少し違う笑みを浮かべる。

「取引ではない。契約だ。取引では効果が低いだろ。それに俺は魔法使いとか、吸血鬼とかが、嫌いなわけではない。俺が嫌いなのは現実を知らぬバカだ」

俺はその一言で切りふせる。

「確かにな。ここにいる魔法使い共は皆お前の言う『現実を知らぬバカ』共ばかりだ。で、私はお前と契約して何の得がある？」

「・・・お前にかかれている呪いを解いてやる」

その言葉にエヴァンジェリンは驚愕し、口をパクパクと魚のように

開閉させている。

「でっ出来るのか！？そんな事が！！」

「俺は嘘はいわん。そのかわりお前には俺の駒になってもらう」

「関西呪術協会の使者が悪の魔法使いの代名詞である私と手を組むと？」

「それがカモフラージュになる。まさか、かの闇の福音と関西呪術ダーク・エヴァンジェル協会の使者が繋がってるとは思うまい。それにお前はあのぬらりひよんと唯一対等・・・いや見下して話せる存在だしな。その方が情報の手元に困らなくて済む」

俺もエヴァンジェリンに負けない笑みを浮かべる。

「・・・いいだろう。結ぶぞ、その契約」

エヴァンジェリンが俺に右手を差し出す。

「いいのか？この契約はお前の方が少し不利だぞ？」

「契約を持ち込んだお前が言うか？それに私はいつに16年間もここに縛られてきた。その仕返しをするのも悪くはない」

「そうか、じゃあ契約成立だな」

俺も右手でエヴァンジェリンの右手を掴み握手を交わした。

イマジネーション
幻想殺しの宿った手で。

途端に魔方陣が展開されエヴァンジェリンの体に巻きついていった鎖があらわになり、それが音をたてて崩れ去りチリへと変わる。

「お前！今何をっ！」

光が落ち着き魔方陣が消えたところで俺はエヴァンジェリンの手を離した。

「契約通りお前の呪いを解いた。これでお前は晴れて登校地獄から開放された。そして俺の手駒となった」

俺はニヤリと笑みを浮かべる。

「どうやって……あれはあの千の呪文の男がかけたものだぞ！今の握手如きで解けるようなものでは！それに魔力がほとんど戻っていない！」

どうにも腑に落ちない。出来るはずが無い。必死に千の呪文の男をフォローしているように見えたのは俺の気のせいだろうか？

「それが俺の力だ。まあ時がきたら話そう。ああ、あと魔力の事だが、あのぬらりひょんが一枚噛んでいるらしい」

後で調べて分かったが、千の呪文の男がエヴァンジェリンにかけてのは登校地獄だけ。登校地獄には魔力を封印する効力は無い。すると考えられるのはあのぬらりひょんしかいない。

「……おい」

「何だ？」

「私の持てる力を全て駆使して奴を始末しに行っているかい？」

殺気がフツフツと湧き上がってくるのがよく分かる。

「だめだ。それはこれからやっていく。それに見ものだと思っぞ。あのぬらりひょんが絶望する顔がだんだんと露になっていく様子をみるのは」

くくく。と俺は微笑を浮かべる。

「・・・っち。分かった。お前の案に乗ってやろう。しかし、いつか私はあいつを殺るぞ」

いかにも不服そうに舌打ちをするエヴァンジェリン。

「では納得してもらったようだし、行こうか」

「どこにだ？」

「俺たちの同志を助けにな」

月明かりに照らされた俺の顔。さて、どんな顔をしているのだろうか。

俺はそう思いながら教室の窓を開けて戦場に向かった。顔と頭を布で覆い目だけを出しその額に鉄の額当てをして。

「それでは、誰だか分からんな」

エヴァンジェリンが笑ながら隣を飛んでいる。魔法使いは楽でいいな。まあ俺も翼を出せば楽だが。

「それでいい。俺だと認識されてしまつてはこの作戦は成功しない。お前も全力で認識阻害をかけておけ。まだお前の存在は知られたくない」

「んなつ！私は影で働いただけか！？」

「そんなに目立ちたいのか？」

俺は口元を少し緩める。

「そ、そうではない！来い！茶々丸！お前にも認識阻害をかける。超協力な！」

「そうしてくれ」

どおおおおおおおんんん！！！！！！

激しい爆発音が聞こえる。さよはこんなのを毎晩聞いていたのか。こりゃあ参るわな。

「前方400m先で爆発。刹那さんと楓さんが戦闘中の模様。怪我等の分析はまだ出来ませんが生命維持は確認できます」

茶々丸がスコープを使い適切かつ迅速に戦闘状況を報告してくれる。

「了解。これより俺たちは楓及び刹那の救出に向かう。魔法使い共

には決して我々だと言う事は気付かれるな」

「ふん！貴様になど心配されずとも。私を舐めるな！魔力なんぞ無くても、貴様にも見破れない強力な認識障害をかけてやってやるさ」

「頼んだぜ、エヴァンジェリン」

「……で……い」

「ん？何だつて？」

あまりの小声さぶりに俺の耳でもエヴァンジェリンの声が拾い上げられない。

「エヴァでいい。エヴァンジェリンじゃ長いだろう」

エヴァが顔を真っ赤にしながらいってくる。もうそっぽを向いてしまっているが。

「分かった。エヴァ。頼む。俺はお前とは契約者だ。信頼してるぜ」

「ああ、いいだろう。私の恨みとくと受け取れ。バカな魔法使い共」
「！」

エヴァと俺は速度を上げ、楓と刹那のもとに向かった。

第十七話（後書き）

話し合いだけで三話も使ってしまった・・・
次回から戦闘に入る予定です。てか、入ります。

では、また次回お会いしましょう（＾|＾）ノ

第十八話（前書き）

今回は久しぶりの戦闘描写。

楓と刹那だけですが・・・

楽しんでいただければ幸いです

では、どうぞ（＾ー＾）ノ

第十八話

Side: 楓

兄上の作戦に乗った瞬間にこの要請。拙者たちが世界樹の前に行くともう既にいつもの仕事仲間が揃っていた。

「すまぬな。こんな時間に・・・」

学園長が申し訳なさそうな顔をして言ってくるが先ほどの兄上の話を聞くと本心でそう言っているのかが分からなくなってきた。

「いやいや、それで今日は何でござるか？」

「魔物倒したそうだ。今回は数が以前より格段に多いらしい」

真名。拙者の良き仕事仲間だ。しかし兄上の作戦に乗るとなると真名とも手を組む事はあまり無くなるかも・・・いや、それは無いな。真名は傭兵。金さえ払えば誰にでもつく。

「ほう、それは楽しみでござるな」

「そういうことなので今回は二人一組で戦ってもらいたい。何かあっても二人いれば対処はいくらでも出来るからもう」

「了解しました(でござる)」

拙者は刹那と組む事にする。何かあっても二人だけなら兄上を呼べる。あまり兄上に頼るような事はしたくは無いが・・・

「私たちの担当は女子中等部西エリアか。二人だからといってもこの範囲は広すぎる」

「まあ、仕方ないでござるよ。人事不足でござるから。しかし考えようによっては拙者たちをわざとこの範囲も広くしかも量が多そうな場所に配置した。とも考えられるでござるが」

真名は刀子先生と女子中等部北エリア担当であるがあそこはあまり広くない上に出没数も多くは無い。この西エリアは寮があるためか出没数が一番多い場所である。その辺を考えるとやはり学園長は拙者たちを捨て駒のように扱っているようにしか思えない。

「む・・・確かに。やはり信用ならんな。颯先生の計画。私も乗らせてもらう。このままでは木乃香お嬢様だけでなくクラスの皆も危ない」

「そうでござるな。・・・さて、おしゃべりもこの辺で終わりにしないといけないみたいでござる。刹那、その話は兄上の前でもう一度話して欲しいでござる」

「了解した！先ずは目の前の敵に集中しようか」

私はそういつて野太刀「夕風」を抜刀し、楓はクナイを出す。

その数秒後に突然魔方阵が展開。召喚魔共の大群がうじゃうじゃ出てくる。その数およそ500！！

「おいおい。これは流石に・・・」

「ひどいでござるな」

拙者はなかなか開けない目を開けてその光景を凝視する。刹那もこの数の多さには正直度肝を抜かれたようだ。拙者が戦った最高数の召喚魔は300。倍とまではいかないがそれに近い数はいる。あの時でさえ拙者は死ぬ思いをして倒したのだ。今回は二人とはいえかなりきついだらう。

「応援を呼ぶ。ここから一番近いのは真名だ。その間楓は奴らの相手、頼めるか？」

「承知！」

刹那が懐から携帯を取り出すのよりも早く拙者は地面を蹴り召喚魔共の前に飛翔する。そのまま起爆札を取り付けたクナイを数十本投げつける。

「ヴァーン！」

の言霊が起爆札に書かれていた文字と反応し火種となって周りの札に移っていく。さらに今爆発真つ盛りの起爆札の中に煙幕を偲ばせる。辺り一帯は真つ白の煙で覆われ奴らも自分も目を封じられる。

しかし拙者の場合魔物の発する魔力を感知出来るので、視覚が失われてもあまり困りはしない。それはあちらも同じだらう。あいつらは鼻が利く。拙者のにおいを探って位置を割り出すだらう。

しかし、それは遅い。いおいが残っている場所にはもはや拙者はいない。そこから居る場所を予測しても遅すぎる。

案の定混乱している奴らの後ろに上手い事回り込み気を練りこんだクナイを飛ばす。煙と爆発に撒かれた召喚魔はクナイが纏っている気に当たって煙となっておそらくは召喚者の下に戻っていく。

最初の爆発と先ほどの気を纏ったクナイで減った数は20程度。全くもって減った感じがしない。ああ・・・気が重い。

拙者は気が滅入りそうになりながらも動き続ける。そのうち右の方で爆発。それが治まったかと思うと今度は左。上空。前方。後方。次々と爆発が起こっていく。それだけでも減った数はおそらく90。一割にも満たない・・・

左右と上空、前方は拙者の分身。後方は先ほど戦線に復帰した刹那だ。

「おお、刹那戻ったでござるか」

拙者が刹那の下に飛ぶ。無論分身ではなく実態だ。

「すまんな、楓。真名と刀子先生も呼んだからすぐ来てくれるだろう。高畑先生にも連絡は入れた。来れる人数はこちらに回してもらえるだろう」

刹那は夕風を構えなおし、拙者は札と大型の手裏剣を構える。

「さて、応援が来る前に出来るだけ数を減らしておくとするか」

「そうでいじめるな」

拙者たちはほぼ同じ瞬間に地面を蹴り召喚魔の下へ攻撃を仕掛けた。

「神鳴流奥義、百烈桜華斬!!」

刹那が神鳴流の技を出してまた20減った。

拙者の分身たちがまた80減らした。

しかしこの数いくらやっても・・・

「減った気がしないな(でござるな)」

流石に大技を二回もやると息も上がってくる。しかしそんな事もいつてはられない。拙者たちは手を休めず召喚魔退治を行う。

拙者は分身で数を分担して減らし、刹那も神鳴流の技で数を減らしていった。

「おうおう、お嬢さんたち。強いがそのへんにして諦める。我らの数はまだ300近くいる。二人で相手するにはちと多すぎる数だと思うが?」

「っぐ!」

刹那が漏らした苦痛のため息に拙者も同感だった。どう考えてもこの数を二人で倒すのは無理がある。倒しても倒しても次の敵が目の前に現れる。

しかしここで拙者たちが倒されればその後ろで守られいる麻帆良の生徒に危害が及ぶ。それだけは絶対に避けなければならないこと。

「つぶ、貴様ら程度に心配される筋合いは無いでござる。行くでござるよ、刹那！ここは何としても食い止めるでござる！」

「ああ、分かっている！」

「手こずっているようだな、お二人さん。手伝おうか？」

声をかけられた方に目を向ける。そこにいたのは顔を布で覆い額に鉄の額当てをした男と、見知らぬ幼い少女と、自分と同じぐらいの少女が空中に浮かんでいた。

Side END

Side: 颯

俺たちが楓たちの戦場についた時はあまりにもひどい状態だった。

400の召喚魔対楓&刹那。圧倒的に数負けしていた。しかし状況をしばらく見ていると結構なハイスピードで敵を減らしていく。

「おい、このままではやがで体力負けするぞ。いくらお前の妹と刹那だからと言っても400を相手にするのは人間には無理だ」

「だろうな。ましてや魔法使いの様に大型の攻撃が出来る訳でもない。ここが東洋魔術師の限界だな」

俺はそう言いながら唇を噛みしめる。そこそが西洋魔術師に東洋魔術師が下に見られる原因なのだ。

力も無いくせに出しゃばるな。

そこが西洋魔術師の本音なのだろう。確かにそうではあるがな。だが、実際俺は西洋魔術師に劣らない能力を東洋魔術師も持っていると思う。

式神なんかは西洋魔術にも似た様なものがあるが東洋魔術の方が遥かに精度が上だ。

接近戦になってしまえば剣術や体術も遥かに東洋魔術師の方が上だ。

西洋魔術師が東洋魔術師を下に見るのは戦ってみたことが無いから。所詮ここにいるのは自称『正義の味方』の方々。そんなことはしないのが当たり前などでも言うだろうか。

そんな思考をしていると二人とも流石に息が上がっていた。

流石は我が妹と刹那だなあ。あれだけの数を目の前にして一歩も引かずに士気を落とさんとは。

そこに召喚魔の一体が楓たちに話しかける。

「もう止めるや」

その言葉に楓は

「貴様らに心配される筋合いは無い」

その言葉を聞いたから俺は楓たちの助っ人に入った。

「手こずっているようだな、お二人さん。手伝おうか？」

俺はそう話しかけた。エヴァに空中に浮かべてもらって。あくまで演出。地上で話しかけてもインパクトないしな。楓たちは兎も角召喚魔や今頃到着した真名たちにも。

「誰だっ！」

刹那が声を張り上げる。

分からんか。刹那で見破れなければ上々。楓には・・・ばれたか。

楓がこつちを今にも吹き出しそうな顔で見上げている。

まあ、楓のことだ。ここで俺が姿を晒してはいけないことを察したのだろう。

「待て、刹那。手伝ってもらえるなら、手伝ってもらった方が良いでしょうよ。どちらにしろここは拙者たちだけでは無理でござる」

「・・・しかし」

「つべこべ言っている場合では無いと思うぞ。私も楓の考えに賛成だ」

「私もだ。こちらに危害を加えないのなら今は手伝ってもらった方が良い」

今到着した真名と刀子先生が刹那の迷っている判断に決着をつけさせる。

「真名に刀子さんまで！つく、分かりました。・・・お願いします！」

刹那がこちらに声を張り上げて言う。全く素直に恩恵を受ける。まあ警戒することは良いことだ。

「承知した。では貴女らは少し休んでいられよ。後は我らが受けもとつ」

俺はそう言ってここにいる全員の周りに保護用結界を施す。

これは守るという意味もあるが、同時にここに留まらせるという意味も持つ。

「せて、やろうか？愚勢共。お前たちは俺を前にしてもなお先程の様に笑っていられるか？」

俺は言い終わらぬうちに体から殺気を放出する。その量と質の高さにここにいるエヴァと茶々丸以外の人間が震え上がる。

「さて、久しぶりの前回だ。本気でやって良いんだろう？」

「無論だ。結界を施した。多少の衝撃と音、破壊は防げる」

俺が言うとエヴァは愉快そうに笑った。

「お前は誰だっ！いきなり俺たちの前に現れたかと思ったら、女の子全員連れて行きやがって」

召喚魔の一体が叫ぶ。

「ああ？俺か？俺はお前たちに現実を教える者だ。少しは楽しませてくれるんだろう？」

「面白い。上等だぜ、兄ちゃん！その減らず口いつまで叩けるかみものだなあ！！」

さっきの俺の殺気を浴びてもなお向かってくる奴ら。バカだな。

俺とエヴァは静かに微笑し茶々丸はいつものポーカーフェイスで向かってくる彼奴らを静かに見つめた。

第十八話（後書き）

やはり戦闘描写というものは難しい

ああ・・・文才が欲しい

今回は久しぶりの颯の戦闘と始めてのエヴァ&茶々丸の戦闘です

ではまた次回をお楽しみに

第十九話（前書き）

今回は颯、エヴァ、茶々丸の戦闘です。

では本文をどうぞ（＾ー＾）ノ

第十九話

Side: 颯

大口を叩いた大将格の召喚魔は前には出ず配下のものが数十匹の大群となって襲い掛かってくる。

「その判断は正解だ。だが、数が少ないな。では左右を二人で頼む。後は私が片付ける」

「ふははっ！任せろ」「任務了解しました」

二人の返事を聞いてから俺は地面を蹴って上空に舞い上がる。そのまま空中で回転して幻想殺しの宿った右手で殴り倒す。そのまま重力に従い地面に降下するが、着地する際にも体を回転させながら下にいた召喚魔共を蹴り倒す。しかし着地しても動きは止めず、そのまま蹴りを繰り返す。

その時エヴァは・・・

何か液体の入ったフラスコを数本小さい指の間に挟めて取り出し前方に放り投げる。

フラスコが割れ、中の液体を媒体としていくつもの氷の柱が構築される。その氷の柱ができている場所は的確で、次々に召喚魔を突き刺していく。

封印は解かれたものの魔力が充分ではないからか心なしか怒りが混じっているような気がする。

その時茶々丸は・・・

構えた大型のライフルをやはり無表情で撃っている。しかし撃ちまくっていたせいで弾切れを起こしたようだ。その代わりにアサルトライフルを取り出し、撃ちまくっている。弾丸にはエヴァの魔力がこもっているらしく、当たった瞬間に召喚魔は煙へと変わる。

ポーカーフェイスで撃っているからか茶々丸が一番怖い。

俺はそんな光景を脇目で見ながら自分が担当する召喚魔のもとに走る。

「なっ！何なんだ、お前らは！！」

先程余裕たっぷりだった大将格の召喚魔は先程とは違ってかわり少々怯えながら叫んでいる。

「言つたろう？俺たちは、お前らに現実を教える者だつて」

俺は冷ややかな笑みを浮かべながら疾走を続ける。

「つぐ、あの男を集中的に攻撃しろ！あいつを倒せば勝利は我らに動く」

大将格が周りの召喚魔に叫ぶとそいつらは今までの動きに統一性が無かったバラバラではなく、攻めに適した三角形の陣形をとる。

「面白い陣形だな。かつての戦国武将が使った陣形だ。しかしいいのか？俺に戦力集中させてしまって。二人の強敵が残りの戦力あつ

というまに潰してしまっぞ?」

俺が横目でそちらを見るように促すと案の定エヴァと茶々丸の担当した区域はもう少々で終わりそうだ。

「黙れ! 貴様を倒さんと我らは・・・お前ら、やれ!」

大将格の命令に従い、陣形のとれた召喚魔の壁は俺目掛けて一直線に走ってくる。

我らは・・・? この襲撃の目的はやはり俺の打倒か。しかし何故直接俺を狙わない。この数だ。何体かは陽動として使ったとしても、俺を探して殺させるくらいは出来たはず。

俺はそんなことを思いつつ、突撃される数秒前に、瞬動を使い奴らの背後に回る。俺の動きに目がついてこないのか勢いを余して静止をかけようとする。俺は後ろから正面の召喚魔の一体に右正拳を叩き込む。

「なっ!?!」

俺の正拳を喰らった召喚魔は驚きを隠せない様な顔をして煙へと変わって消えていった。

正面の召喚魔が消し去ったために一度陣形が揺らいだ。

俺はその揺らぎを見逃さずもう一度右正拳を近くの召喚魔に喰らわせ、その反動で蹴りを入れ召喚魔たちを一瞬怯ませる。その隙に俺は起爆札つきのクナイを投げ込む。

「ヴァン」

その一言が火種となり一瞬にして先程まで召喚魔であふれていた場所に火柱が上がる。

煙が消え去った頃には召喚魔の姿は無かった。あつたのはもくもくと上がる煙と怒りをあらわにした大将格の召喚魔の顔だった。

「さて、最後の制裁を下そうか」

俺は正面の召喚魔に今までの以上の殺気を放つ。しかし相手も大将格。怯みはしない。

くくく。面白い。この量の殺気を浴びて怯まんか。他者を率いる資格。持っている様だな。

俺は笑みをこぼしながら一歩一歩、歩みを進める。

「俺を今までのような雑魚と一緒にするなよ。俺は『鉄鼠』てつそ今まで
のようにはいかんぞ」

鉄鼠と名乗った召喚魔は俺目掛けて走りながら懐から赤い箱を取り出し開け放った。

多少の焦りがみえる。

「我が配下のネズミ共よ。我らの敵を喰らい尽くせ！」

開け放たれた箱から出て来た何万というネズミの大群は俺やエヴァ茶々丸を目指して走り回る。

「このっ！人を喰らう類のものか」

俺の服の袖や裾に喰らいついて今にも俺を食いちぎろうとしている
ネズミを振り払い俺は飛翔し近くの木の上に着地する。

エヴァと茶々丸も空中に一時退避。ネズミ共が楓たちのもとに走る。

「二人ともこいつらの掃除を頼みたい」

「全くだいところは全てお前にもっていかれるのか・・・まあでも
今日は特別だ。行くぞ！」

「了解です」

しぶしぶながら了解してくれたエヴァ。相変わらずポーカーフェイスの茶々丸。

この二人に背中を預けても心配はないし、絶対に楓や刹那たちを守
つてくれる。この短時間によくまあここまで信頼出来るもんだ。

俺は心に中で少々微笑を漏らす。でも・・・

ありがとう、エヴァ。

ロープから数本のフラスコを両手に掴み、一気に空中に放り投げる。

レフレクシオー
「氷楯」

エヴァが発動させた氷楯は辺りを埋め尽くしているネズミの動きを

凍らすことによって止める。

「弾丸セット完了しました」

「やれ」

「了解」

茶々丸のミサイルはエヴァの『氷楯』で動きを止められたネズミ共のもとで止まり一気に爆発した。

しかし鉄鼠の箱から出るネズミは以前として減らず、先程と同じペースでネズミ共は出続けている。

「何なんだ・・・これは」

「そいつらは我が配下のネズミ『厨子鼠』。その箱を壊さない限りネズミは出続ける」

エヴァの驚きに鉄鼠は多少の余裕が出来たのか落ち着きを取り戻し笑みを浮かべながら『厨子鼠』の説明をしている。

「お前バカか？んなこと言ったら、壊して下さいと言っているようなものだぞ？」

「ふん、壊すことが出来るならやってみるがいい。その箱には強力な結界が施してある。その女でも壊せまい」

鉄鼠が余裕綽々といった感じでこちらを見る。侮られてんなあ、エヴァ。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

そんな箱一つに詠唱魔法使わなくても……でもちよつと待て。エヴァの魔力はぬらりひょんのおかげで、詠唱が必要な魔法は使えないはずだが。

「……なんてな。私がこんな箱ごときに詠唱魔法なんぞ使うと思っただか？」

ふはは。とお決まりの笑い声をあげる。おそらくは負け惜しみを悟らせない為の笑だろう。

「そんな簡易結界、これで十分だ。氷結 武装解除！」

フリーグランネクサルマティオー

武装解除によつて箱の強力な結界なるものをいとも簡単に貫通。

「はあああ!!」

周りの地面がみるみるうちに凍りつき、氷の柱が構築され、粉碎。そのまま周りにいたネズミも一緒に消し去っていく。

「なっ!?!」

今度は鉄鼠が驚く番だった。

「おいおい、どこを見てるんだ? お前の相手は私だぞ」

俺は鉄鼠の顔に蹴りを一発くらわせる。

「つぐ！」

鉄鼠は蹴られた反動と自ら地面を蹴った反動で俺との距離をあける。

「私も早いところ勝負をつけてこの場所から去りたいのでね。さっさと決めさせてもらおうか」

「ほざけっ！」

強気にでた鉄鼠は真っ直ぐ俺に向かって正拳を打ち出す。俺はそれを体をずらすだけで回避し後ろへと回る。鉄鼠は先ほどの正拳の勢いを利用して裏拳をくりだす。

「ほっ」

俺は思わず感嘆の声を上げながら横殴りに来る正拳を状態を仰向けに倒し回避する。そのまま片手で逆立ちになる。

先ほどエヴァが放った魔法のせいで地面がかなり冷たい。しかし凍ってはいない。これが凍ってなくてよかった。滑るもんな確実に。

その状態のまま真っ直ぐに足を蹴り上げる。足の先にあつた鉄鼠の顎の骨はそれによつて粉碎。おそらく舌も今の衝撃で噛み切ってしまったのだらう。口から絶え間なく血液が流れ出ている。

陸奥圓明流「孤月」

その技名を名乗ることなく俺は静かに目と鼻の先にいた鉄鼠を見下ろす。

「つぐう・・・」

鉄鼠がうめき声を上げながら後ろに飛翔し距離を取ろうとする。しかしそれは俺が許さない。俺は瞬動で鉄鼠との距離を詰め、正面を見ながら後退する鉄鼠の顔面に思いつきり正拳を喰らわせる。

「がつ！」

俺の正拳で後ろへ殴り飛ばされる鉄鼠。ちなみにさつきは左手で殴ったので幻想殺しは作動してイマジンプレーカーいない。即ちこいつが煙となって消えることはない。

「さて、お前の目的と召喚者について聞かせてもらおうか。何故俺を狙った」

俺は鉄鼠に殺気を浴びせ右手をちらつかせてみるが効果は薄いようだ。

まあ、ここに攻め入ってくる召喚魔の大將格だ。そんな安易に口を割るわけは無いとは思っていた。

「そうか。そこまで口を割りたくないのならこちらも強行手段を取らせてもらおう」

俺は手招きをしてエヴァを呼ぶ。怪訝そうな顔をしたエヴァだったが、やれやれと顔を数回横に降り鉄鼠の前に仁王立ちする。

「読心術だろ？私はそこまで得意じゃないが良いだろう。隅々まで覗いてここで公開してくれよう」

エヴァがお得意のいたずらそうな笑みを浮かべ鉄鼠の顔を凝視する。

「分かった！分かったから、読心術だけは！」

鉄鼠が必死の顔でエヴァに訴えている。

何か読まれては嫌なものでもあるのだろうか？

「麻帆良学園を襲え。そうすれば忍者装束を着た男が来る。それを排除しろ。その男が出て来なかった場合、麻帆良学園を消せ。それが我らが召喚者と交わした契約だ」

鉄鼠が全て話した後、不本意そうにため息を吐いた。

なるほどね。数が大量だったのもこれで納得がいく。しかしまあ俺を倒すだけのためによくこれだけの召喚魔と契約を交わしたものだ。契約だって無限に出来る訳じゃない。それなりの魔力と霊力を消費する。これだけの数の召喚魔と一度に契約する召喚者だ。魔力と霊力は桁違いだといっていいだろう。

まあ、俺も人に恨まれるような事は色々やって来た。それはあくまでも任務であり、俺の私情が入っているわけではない。全く良い迷惑だ。

「そうか、もういい。大人しく召喚者の下に戻れ」

俺は幻想殺しを鉄鼠の額に持っていく。

イマジンブレイカー

「ああ、そうだ。戻ったら召喚者に言うっておけ。俺は何時でもお前

の挑戦を受ける。だがやるときは、一人で来い。そう伝えておけ」

ふん！

召喚魔は鼻を鳴らした。腹を決めたようだ。

俺は鉄鼠の額に右手で触れた。

鉄鼠は煙になってその場から消え去った。

殴らなかったのは素直に話してくれた礼だ。

それに奴らは俺たち人間に契約をして使われているだけ。奴ら自身に直接悪意はない。

しかし、伝言は素直に伝えてくれそうにない。

ああ、現実ってのはそう簡単にいくようには出来ていないようだな。

第十九話（後書き）

今回使用した『厨子鼠』は犬夜叉にでてきたものです。

この日は次回で終わりです

ではまた次回お会いしましょう

第二十話(前書き)

ガンドルフイーニと対決します。戦闘はしませんが・・・

では、ごきごき(ハハハ)ノ

第二十話

Side: 颯

戦闘が終わってから時計を確認すると、俺が介入してから二十分が経過していた。

それにも関わらず、魔法先生や魔法生徒の応援は今だにこない。

他の場所の気配をざっと探ってみたが、数はせいぜい多くて100。こここの五分の一程しかない。

学園長も数が少ない所を一人に任せてもう一人はこちらに向かわせれば良いものを、それをしようとはしない。

「さて、貴殿らの敵は私たちが片付けた。しかしどうだ？私がおこにきて約20分。誰一人として応援が来ないというこの現状。どう思う？」

くくくと笑いながら俺は楓たちに問いかける。

「つぐ、それはっ！」

刹那はまだ気づいていないらしい。まあ、認識障害が働いているからだろう。これで破られたらこの忍者装束を作り変えなきゃならない。

刹那は不本意そうに言葉を詰まらせる。答えないのにそれを答えてしまつては、認めてしまつという事になる。それはなるべく避けた

い。そういうことだろう。

「ここにいるのは、関西呪術協会所属の者と、ただの雇われ傭兵。対してここは関東魔法協会のお膝元。どちらが大切で、どちらに戦力を回すか、なんてのは直ぐに分かることだ」

真名が静かに目を閉じて言うのを刹那は唇を噛み締めて聞いていることしか出来なかったようだ。悔しそうに表情を歪めているのがここからでも分かる。

「ふっ・・・貴殿らも複雑な関係の上にいるようだな。私も関西呪術協会の者だ」

「「なっ！」」

刹那と刀子先生がきれいに驚きの声を八もらせた。しかし楓と真名は驚きもせず、ただ平然を保っていた。

「私も今のように関東魔法協会と関西呪術協会が睨み合いを続けるのは些か都合が悪いのでな。貴殿ら関西呪術協会の者が助けを求めるとき、私は救いの手を求めるために参上しよう」

俺はそのまま身を翻しこの場から去ろうとした。

しかしそれをたった今到着した関東魔法協会の連中が許さなかった。

「何者だ！貴様らが今回の首謀者か？話を聞く。そこの三人、こちらに同行していただく」

昨日資料でみたこの魔法先生。ガンドルフィーニが銃口をこちら

に向けて怒鳴っていた。

「ふふふ。たった今到着したところを見ると周辺の召喚魔は退治し終えたか？」

俺がそう問いかけるとガンドルフィーニは怪訝そうな顔をして言った。

「貴様、何故それを知っている！？やはり話を聞く必要がある」

ガンドルフィーニは左右に魔法先生や魔法生徒を展開。それぞれ魔法媒体を構えて戦闘状態のまま俺の周りを囲んだ。

まったく、無意味な事を。

「それでその四人を助けに来たつもりか？・・・いや、愚問だったか」

俺は一人で静かに微笑を漏らす。その静かな表情がガンドルフィーニの耳にも聞こえたようで、なにっ！と銃口はこちらに向けたままにして叫んだ。

俺はそれを無視して続ける。

「私は鬼一きいち。今回は我が同胞が危険な状態に陥ったので介入したまで」

「なぜ貴様はそんなことをする」

「私が動くのは関西呪術協会のためだけじゃ無い。私はここが危険

な状態に陥った場合や我が同胞が危険な状態に陥った場合は助けに入る」

今回の目的は二つ。

一つは正体が知られないように楓たちの助けに入ること。これによって刹那に今関西呪術協会がここで受けている扱いを知ってもらうこと。まあ、正体の方は楓にバレたが。

二つ目は俺たちが関東魔法協会と接触することによって、俺たちが関西呪術協会であるという存在を知らせ、尚且つ関東魔法協会には戦意は無くあくまでも保護に当たるといった目的を明かすこと。

案の定、それを聞いた魔法関係者は驚きを隠せないようで、ざわめきが次第に大きくなっていった。

「静かにしろ！」

この場の最高責任者はガンドルフィーニようだ。ざわついている魔法関係者に喝をいれ、緊張の空気が静寂の中に流れる。

「何故貴様がそのようなことをする必要がある！？ここは我々魔法使いで十分だ！」

ガンドルフィーニはさも自分たちは実力がありここを守ることが出来るとも言いたそうな声で言った。

「そうとは思えんな。事実、ここは突破されそうだった。それはなぜか。召喚魔の数が他とは桁違いだったからだ。しかし、救援を求めてもそれにそちらは応じなかった」

俺は怒りを表には出さずただ静かに言葉を繋げた。今ここで自分が怒りを露わにしましては今後の作戦に支障をきたす。そう思っ
て必死に堪えた。

「それは手配が間に合わず・・・」

最後の方を濁しながらガンドルフィーニが答えた。しかしそれはあまりにも言い訳じみていた。

「私はこの一般人を守るために戦う。悲しいな、同じ人間として」
俺は煙幕を張りこの胸くそ悪い状況を離脱した。

後ろから魔法使い共の制止の声が聞こえたがそれも儚く宙に響いた
だけだった。

—————

あの後、もう一度時計を確認すると午前三時を回っていた。俺はエ
ヴァに家まで送っていくと言ったんだが

「契約者ならこんな遅い時間なんだしお前の家に今日は泊める」

と無理やり極まりない理由と要求を請求してくる。

しかし、俺の家とエヴァの家とは方向が違うだけで、たいして距
離が変わらない。

俺がエヴァにそのことを言うと、

「面倒臭い。それに私を送っていくと遅くなるだろう?。」

もっともそんな理由に、いつも通りの意地悪そうな笑みを添えられた。しかしその笑みはいつもの勝気な感じではなく、どうしてもここに居たい。そんな感じだった。

茶々丸から聞いたが、エヴァは日本文化がお気に入りらしく、俺の部屋はエヴァの好みのストライクゾーンだったらしい。

そういえば部活も囲碁に茶道だったもんな。

俺の家は外見こそログハウスだが、内見は日本風なのだ。畳張りの床。スライドする白い障子。壁に掛けてある『鬼神修羅也』と書かれた掛軸（じつちゃんが書いたのを貰った。以外と上手い）

何かについて、あれは何だ?これは何だ?と目をキラキラさせながら、俺に聞いてくるエヴァを見てみると、追いつく意欲が失われたのである。

しかし、お茶も出さないのも悪いので俺がお茶を入れようと台所に向かうと

「颯先生、お茶なら私が」

そう茶々丸が申し出てくれたが、俺はそれを丁重にお断りした。

「ごういうにはホストがするもんだろ?それに俺はお茶を入れるのは上手いんだぜ。茶々丸にはエヴァが何か壊さないように見て欲しい。あの目は危ない」

今のあいつならやりかねん。

俺はなっ？と茶葉の入った缶を振って見せると、一応了承してくれたようだ。しびしびエヴァの元に戻っていった。

お茶の入れ方は母上に習った。忍たる者、お茶ぐらい美味しく入れられなくてどうします。依頼の時にはいつも入れられる側では無いのだからね。と、それを口実にしっかりとしごかれたのだった。

俺はお茶とお茶菓子の和菓子を三つずつ畳の上に並べた。今日の和菓子は葉っぱをモチーフにした餡子菓子だ。

「ほら、エヴァ」

抹茶ではなくただの緑茶なので、そこまで気合を入れる必要はないのだが、お茶の前にちょこんと正座したエヴァは香りを楽しんでから小さな湯のみに入ったお茶をゆっくりと口へ流し込んだ。

「ほう。結構なお点前で」

「お粗末様です」

お決まりのセリフから始まり、エヴァの興味は今度はお茶に移ったらしく、これはどこの茶葉だとか、どうしたら美味しく緑茶を入れるのかと質問攻めにあつた。

たいして茶々丸はというと、俺の答えを記憶メモリーに記録しつつ、目の前の和菓子を興味深そうに眺めていた。

和菓子は面白い形や色をしているからな。

「そういえば、楓たちがお前を知らないことを証明しなくて良いのか？」

聞くことは聞いたらしく、思い出したように話題を切り替えてきた。しかし、いきなりだな。もしや自分の趣味に集中し過ぎて今まで忘れてたか？

「あの場合で言っても関東魔法協会の連中は聞く耳を持たないだろうからな。それに疑いを持たせていた方が、関東魔法協会は楓たちを前線には投入しなくなるだろう？」

俺もエヴァに返答しながら、目の前にある緑茶を一口、口に含む。

「確かにな。しかしこれから少なくとも楓たちは事情聴取で魔法先生共に絞られるだろうな」

ふっと笑みを漏らすエヴァ。

確かにその線も考えた。しかし俺があそこで楓たちが何も知らないことを証明すると、余計に楓たちが疑われることになる。最悪の場合俺の正体がバレる危険性も出てくる。それだけは一番避けなければならぬ。

すまない。楓、刹那。ここは大人しく絞られてくれ。後で何か奢るから。

俺は心の中で二人に詫びをいれながら、もう一度緑茶を口に含んだ。

S i d e e n d

S i d e : 楓

兄上が帰り際に放った煙幕のお陰で、先生たちは混乱状態。

「ガンドルフィーニ先生！追いましょう！」

「今更遅い！今回はこの状況を学園長に報告する」

ガンドルフィーニ先生は魔法生徒たちを帰宅させ、数名の魔法先生をつれて私たちの前に立った。

その目には怒りのようなものが宿っているように思えた。

「とりあえず、四人には一度話を聞かせてもらおう」

拙者たちはガンドルフィーニ先生に事情聴取のため学園長室に連れていかれた。

「その『鬼一』という男は何者なのかのう・・・」

関東魔法協会の長、近衛近右衛門が長い髭を撫でながら前に立っている拙者たちに向かって聞いてくる。

そんな事知るわけがないだろう。兄上が変装して名前も変えて戦場に来るなんて事前に知らされていた訳でもなかったのだから。まし

てや拙者たちに悟られないように認識阻害の忍者装束まで着て。

あれが兄上だと分かっているじゃない刹那たちにとって鬼一なんて名前は聞いたことも無いので答えようがない。

「私たちに面識はありません。分かっているのは関西呪術協会を救うために動いているという事だけで、後のことはなにも」

刹那が代表して学園長の問いに答えるが、鬼一と名乗った兄上が関西呪術協会の所属の者であるという事を言わないのは学園長を警戒しているからなのであろう。

その点は刀子先生も真名も何も言わなかった。

これ以上何か言つと色々と面倒になるのを理解してのことだろう。

「そうか。関西呪術協会の所属の者であるかは婿殿に聞いてみるでしょう。すまん、こんな遅くまで」

「いえ、では私たちはこれで」

刹那が学園長に挨拶をし、学園長室を出た。

学園長室を出てから時計を確認すると午前二時を回っていた。しかし空はまだ以前として暗闇に包まれている。

「帰るか」

刹那が発した言葉で拙者たちは女子寮に向けて静かな誰も歩いていないまだ暗い道を歩いて帰った。

第二十話（後書き）

はい、てなわけで第二十話でした。

次回は日常的な感じですよ。

ではまた次回お会いしましょう（＾－＾）ノ

第二十一話（前書き）

ふと気づけば450000アクセス突破。

遅くなりましたが、読んでくださる方々には本当に感謝しています。

まだまだ表現乏しい文章と苦しいストーリー展開ですが、お付き合い
ください

では本文をどうぞ（＾ー＾）ノ

第二十一話

S i d e : 刹那

あの戦闘の翌日。私は颯先生にきちんと私の思いと覚悟、そしてこれからの自分の進むべき道を話した。

「私は先生の考え方に同意します。私は今回の戦闘で私たちの立場とこの危険性を実感しました。今のまま関東魔法協会のもとで活動をしていけば先ず間違いなく、木乃香お嬢様にも魔法の存在がバレてしまいます。ですから私は、先生と共に関東呪術協会を・・・いえ、木乃香お嬢様を守ります」

私はバカだ。今までここで活動していて、違和感を感じた事は何度かあったはずなのに、それをただの気のせいだと意識の外に追いやっていた。

だが実際はそれは学園長が意識してしていた事だった。お嬢様に魔法という存在を認識させるため。最近お嬢様から聞いたが、学園長がちよくちよくお見合いをさせているのもそのせいだろう。何枚かお見合い写真を見せてもらったが、何人の人が魔法関係者なのだろうと思うと頭が痛かった。

だから私はこれからは関西呪術協会のスパイとして関東魔法協会での活動を続けることに決めた。木乃香お嬢様だけでなく、真帆良に住む一般人の平和を守るために。

颯先生は私の話を最後まで静かに聞いてくれた。

「正直俺は真帆良の一般人全員を守れるなんて思っではない。俺が守るべき対象は木乃香お嬢様だ。だが俺たちが活動する事で真帆良の一般人を守ることが出来るのならばそれはそれで俺は否定しない。だから敢えて俺は真帆良の皆を守るうなんて言わない。ただ刹那がそれをやりたいというのなら、強くなれ。いや、俺たちで強くなるう。皆を守れるように」

颯先生はそう言って笑った。エヴァンジェリンさんには長いし、くさいセリフだと吐き捨てられていたが。

颯先生の言葉は私の心にいつも歪みを作る。しかしそれを適切な角度で埋めてくれる。私の迷いも弱さも全て指摘して埋めてくれる。だから私は颯先生に付いていく。同じ使命を持っている人としてもあるが私は長瀬颯に付いていきたい。そう思った。

。

「あ、せつちゃん。おはよう。どないしたん？こんな朝早うに。まだ登校時間には早いえ？」

最近颯先生に言われてお嬢様と明日菜さんと朝は一緒に登校している。毎朝私がお迎えにあがるのだが、今日はいつもの時間よりも一時間も早かった。

部屋のドアをノックし顔を見せたお嬢様は寝癖はついておらず、部屋の中からはバターの良い香りが漂ってくる。どうやら朝ごはんの最中だったようだ。

「お嬢様にお渡ししたいものがありました」

「そうなん？けど立ち話もなんやし、入ったら？」

お嬢様に促され、部屋に通される。明日菜さんはいないところを見ると、まだ新聞配達から帰ってきていないのだろう。毎朝続けられる明日菜さんの体力は素晴らしいと思う。

小さいテーブルの上にはトーストと紅茶とスクランブルエッグが並んでいた。お嬢様はそれらを台所へと片付けると私の前にちょこんと正座した。

私は一昨日颯先生に渡されたロザリオを渡す。本当は昨日渡す筈だったのだが、朝お嬢様のもとを訪ねたら今日は忙しいので明日にして欲しいと断られた。しかもかなり悲しげなお顔で言われた。そんなお嬢様に逆に私は謝罪し、明日の朝。つまり今来ると約束したのだ。

「うわあ、綺麗ななあ。けどどうしたん？これ」

嬉しそうにロザリオを手に取り素直に感想を述べてくれるお嬢様。後で颯先生に伝えておこう。

「私からのプレゼントですよ。この間買い物に行った時にお嬢様に似合いそうだったので買ってきたんです」

流石に颯先生からですとは言えず、私はお嬢様に嘘を吐くことに罪悪感を覚えながらも悟られないように最もそうな理由を述べる。

「へえ……」

お嬢様を取り巻く雰囲気が一瞬にして冷気を帯びたような気がする。バレたか？お嬢様カンが鋭いからなあ……私ごときの嘘では誤魔化せないか。背中に冷や汗ダラダラ流れていくのが自分でもよく分かる。

「あの、お嬢様？」

やはりバレたか。

沈黙を続けるお嬢様。その顔は些か怒りのようなものが見える気がする。それは私が嘘を吐いたことを見抜いたからだろうか？

「何で？」

覇気とともにその一言がお嬢様の口から吐き出される。

その覇気のコモった一言に私は一瞬震え上がった。

なぜだろう。一瞬お嬢様が怖い時が多々ある。戦場で殺気に怯えることなんてほとんど無いのに、お嬢様の覇気にはどうしても怯えてしまう。

「なんでウチも買い物と一緒に連れて行ってくれんかったん？」

「はい？」

出てきた言葉の予想外さに思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「誘ってくればせっちゃんに服とか一緒に選んであげたのに・・・」

指を啜え、子どものように拗ねていらっしやるお嬢様を見ていたら、思わず苦笑が漏れてしまった。

よく考えると、ここに来てから私はお嬢様を避けて過ごしていたために、お嬢様と何処かに遊びにいったことは一度もなかった。

「・・・申し訳ありません、お嬢様。今度は一緒に」

私はさつき吐いた嘘の償いも込めて精一杯の笑顔でお嬢様に詫びた。

「うん！」

私の詫びにお嬢様も屈託のない笑顔と澄みきった声で返答してくれた。

「ただいま〜あ、刹那さん来てたんだ。今日はいつもより早いね。どうしたの？」

丁度いいタイミングでドアが開き、明日菜さんが帰ってきた。

「あ、いえ。今朝はお嬢様に少々お話したい事がありました」

私がさつきの問いかけに答えると、へえ。とだけ言って制服に手を伸ばした。

「ってええ！？もうこんな時間？」

壁に掛けてある時計を見ると、登校時間まであと30分。ゆっくりしている場合ではない。明日菜さんは今やっとこの事に気づいたようだ。

ジャージから制服に着替えるのは私に質問しながらだったので問題ないが、朝食や顔を洗う等の女の嗜みを未だおこなっていないのである。

いくら新聞配達に行く前に顔を洗ったからと言っても必然的に汗はかくものだし、歯磨きだつて朝食を取つたらしたいものだ。

明日菜さんはお嬢様が焼いたトーストを口に啜え牛乳で流し込む。そのまま洗面所へ向かった。

五分程で明日菜さんが洗面所から出てきた。どうやら納得がいったらしい。

「よつし、お待たせ。行こう、学校！」

明日菜さんが元気良く寮の扉を開けた。

S i d e O u t

S i d e : 颯

あれから俺はあの召喚魔達のことについて俺なりに分析してみた。

おそらくあいつらは、前回相手をした契約不履行召喚魔であると思

われる。あいつらの契約者は一度契約を結び、何らかの理由で契約を破棄。しかし召喚魔達は契約内容を実行しないと契約を破棄出来ないのも、力を抑え込まれている。

召喚魔達はその契約不履行を解消すべく、今回の襲撃に至った。

召喚者も一度契約を結び消費した霊力を契約を破棄することによって回復。そしてその霊力でまた他の召喚魔達と契約を結ぶ。

といったところだ。しかし、こんな事が実際に出来るのかということ確信は無い。俺は契約自体にそこまで詳しい訳でもない。

仕方がない。父上に資料送ってもらうか。

しかし、こんなことを悩んでいても解決の策が見つかる訳でもない。俺は学園から支給されたパソコンにUSBメモリーを差し込み今日作り始めたばかりの期末テストのデータの書き込みを行う。

刹那もこっちにつくことを認めてくれたし。楓一人じゃ何となく心配だったから。刹那がいれば楓が先走る事もないし、刹那のナイーブ過ぎる思考を楓が止める事も出来る。これで関東魔法協会へのスパイは大丈夫だろう。

今は真面目に仕事してぬらりひょんに悟られないようにするのが得策か。

「って、あれ？」

画面上を見ると、よく分からないエラーメッセージなるものが沢山

表示されている。

今更だが、俺は機会に滅法弱い。田舎育ちというのもあるし、こういうのに全くもって興味が無いのである。

しかし学校の教師という職に就くとなるとパソコンの使用技術は必須となる。

周りの先生に聞いてその時は理解するのだが、少し時間が経つと忘れてしまう。

一応、いじくってみるが状況は悪化する一方だった。

「・・・先生、パソコン弱いんですか？」

俺が頭を抱えて悩んでいると千雨が見兼ねたような表情を浮かべて横に立ってパソコンの画面を覗き込んでいた。

「ああ、ここに来るまでパソコンを見たこともなかったからな。何しろ家田舎でさ」

俺は照れ隠しのために、はははと笑って頭を掻く。

「こんなにエラー重なってるの始めて見ましたよ。何したんですか？」

「いや、分かんないから適当にいじった」

「はあ・・・」

え？何で？

俺は千雨にかなり深いため息吐かれた。しかし、俺には何故なのか全くもって見当がつかなかった。

「分からないでいじくると余計にひどくなるんですよ」

「分かるのか？この大量のエラーメッセージの対処法」

「こんなのどうとでもなりますよ」

そういうと、千雨は俺の椅子に座りキーボードを叩き始めた。目にも止まらぬそのスピードは瞬く間にエラーメッセージを解除。

千雨がキーボードを叩き始めて一分もたたないぐらいで表示されていたエラーメッセージは全て消えていた。

「すげえ・・・」

出てきたのは感嘆のその一言だけである。自分に出来ない事を他の人間がこなしてしまう。そんな状況では、素直に驚くのが普通だろう。

「これで大丈夫なはずですよ。後は普通に上書き保存すれば、データはUSBメモリーに記録されて取り外せると思いますよ」

そいとうと千雨は椅子から立ち上がり職員室を出ようとドアの方に向かった。

「おい、千雨！」

「何ですか？」

まだ用があるのか？とでも言いたそうな顔で俺を見てくる千雨。

「また教えてもらって良いか？そろそろ先生方に聞くの辛くてさ」

俺はまた照れ隠しを悟られないように頭を掻く。

「その配慮を私にもしてくれろと有難いのですが・・・」

ボソツと千雨が何か呟いたようだったが、よく聞き取れなかった。

今俺は生徒に接する時は聴力、視力共に低下させて常人並にしている。中学生の女子だ。聞かれたくない話だってあるだろう。

「・・・分かりました。私でよければ」

しづしづながら俺の提案に了承してくれた千雨。

「すまない。それとさっき偶然にも見せてしまったデータは報酬代わりだ。大事に頭ん中に閉まっとけ」

そう。さっきまでエラーメッセージで埋め尽くされていたデータは何を隠そう今回の中間テストの問題だ。

回答はまだ作っていないのは不幸中の幸いだろう。正確に答えを知ることが出来ないが問題を見た時点で相当のハンデになる。

まあ千雨の成績は全体でみて中間。良くもなく悪くもない。と言

ったところだ。

むしろ心配なのは我が妹なのだが・・・

「じゃ、ありがたく。それじゃあ私、テスト勉強するんでまた」

そう言って千雨は今度こそ職員室から出ていった。

千雨が職員室のドアを閉めたのを確認し、もう一度目の前のパソコンに向かう。

ピーー！！！！

「まさか・・・」

そこに映し出されたのは、先ほどの倍は有るであろうエラーメッセージ。

俺はさっき閉められたばかりの職員室のドアを開け、まだゆっくりと職員室近くの廊下を歩いていた千雨に助けを求めるのであった。

「またですか！てか、何でこんな早くにそんな大量にエラーメッセージ出せるんですか！」

空はまだ青く星々は遠い夜空で輝いている。そんなたわいもない一時。

第二十一話（後書き）

てな訳で第二十一話でした。

まず、すみません。木乃香が用事が入っていたのは本当なので。ご都合主義というやつです。ほんとうにすみませんorz

もう少しで期末テスト。そして夏休みです

ではまた次回、お会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1501v/>

陸奥の忍

2011年11月24日00時55分発行